

2017年11月1日

みずほディーラーズアイ (2017年11月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 109.50 ~ 114.50

国際為替部 為替営業第二チーム 坂本 真史

■ 先月の為替相場

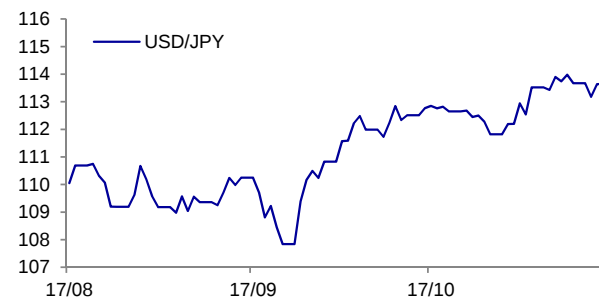
今月のドル円相場はレンジの中で堅調に推移した。
 月初2日は112円台半ばでオープン。4日には次期FRB議長についてタカ派なウォーシュ元FRB理事ではなくハト派なパウエルFRB理事が有力と報道され、米金利の下落と共に112円台前半まで下落。しかし、5日に米下院で2018会計年度予算案が可決し、6日に発表された米9月雇用統計では平均時給の伸び率が好感され、113円台半ばまで反発した。9日週は、112円台後半でオープン。10日には本邦輸入企業によるドル買いが意識される中、112円台後半まで上昇したものの、同日は北朝鮮・朝鮮労働党創設記念日にあたることから挑発行為にでることが懸念される中で上値は限られた。また、11日に発表された米FOMC議事要旨で「一時的でない低インフレを懸念している」とハト派的と取れる見解が示されたほか、13日に発表された米9月小売売上高、9月消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回ったことが重石となり、111円台半ばまで値を下げた。
 16日週は、111円台後半でオープン。前週末のドル売りの流れを引き継ぎ、一時月安値となる111.65円まで下落。しかし、トランプ米大統領が次期FRB議長の候補として、スタンフォード大のテイラー教授を高く評価していると報じられるとドル買いが強まり、112円台前半まで反発。スペイン政府がカタルーニャ州の自治権停止を示唆するとリスクオフムードが広がる局面があったものの、13日は米上院が2018年度予算決議案を可決したと伝わると米金利が上昇しドル買いが進む中、113円台を回復した。23日週は、113円台後半でオープン。22日の本邦衆院選挙における与党大勝との結果に一旦は114円台まで上昇したが、本邦輸出勢によるドル売りが意識されて113円台前半まで下落。その後、次期FRB議長を巡る共和党での挙手投票でテイラー氏が最も支持を得たと伝わり、米10年債利回りが節目の2.4%を上回ると114円台を回復。米国の7~9月期実質GDP(1次速報)が予想を上回ったことにもサポートされ月高値となる114.45円まで上値を伸ばした。しかしトランプ大統領が次期FRB議長にパウエルFRB理事を指名する方向に傾いているとの報道を受けてドル買いは続かなかった。
 30日週は、113円台半ばでオープン。トランプ陣営の元選挙対策本部長であったマナフォート氏らが昨年の大統領選挙を巡るロシア疑惑で起訴されたと報じられる中、月末に向けた本邦勢の円転も意識され113円ちょうど近辺まで下落。日銀金融政策決定会合の結果も大方予想通りで反応は限定的。結局、113円台半ばで越月した。

■ 今月の見通し

今月のドル円相場はレンジ相場継続をメインシナリオと考える。
 主なポイントとしては、①米12月利上げの織込深化の可能性②米国における減税関連措置の議会審議③次期FRB議長人事が挙げられよう。
 ①については、一段の織込深化は困難と考える。米国が直近利上げを行ったのは6月会合である。当該会合の前月である5月初日時点における翌6月会合での利上げ織込みは7割に達しておらず、約1か月後の5月末日時点ですでに8割5分程度まで織込んだ。今月はまさに12月会合の前月であるが、すでに8割強まで織込んでいる。ここから更に米国12月利上げを織込みにいくのは、10月会合(本稿執筆時点では開催中)で強力なフォワードガイダンスが必要だ。しかし、米国経済指標では、7~9月期GDPこそ予想を上回る良好な結果となったものの、9月非農業部門雇用者数、9月小売売上高、9月CPIなど、予想を下回る結果となった指標も多い。9月の指標結果にはハリーケーンが多分に影響しており、数字を額面どおりに捉えられないものの、利上げに一層意欲的になっているとは考えにくい。寧ろ、今後出てくる経済指標の結果を見極めるのが自然だろう。
 ②については、11月中の進展は難しいと考える。9月にはトランプ政権は法人税率を35%から20%への引き下げ等を盛り込んだ税制改革案を発表し、10月には米上下両院が今後10年間で最大1兆5千億ドルの財政赤字拡大を認める内容の予算決議を可決した。ブラディ米下院歳入委員会委員長は11月1日に税制法案を提示し、6日に同委員会でも審議を開始する考えを示している。米上院では定数100の内、60以上の賛成を得なければ、野党による議事進行妨害をとめることができない。しかし、10月の予算決議の成立により、過半数の賛成で税制改革法案を可決できる特例が活用できるようになったとされる。共和党上院議員は52であり、共和党議員の賛成が得られれば税制改革法案が可決できる体制となったと言える。とは言え、減税の財源を確保するために州・地方税等の控除を廃止することが検討されているものの、共和党内でも意見が分かれており、11月中に上下両院で可決するにはハードルが高いと考える。
 ③についてはパウエルFRB理事を有力視する向きが強い。ここでタカ派とされるテイラー氏が議長となれば、相場にサプライズを与えたと想定される。ただ、パウエル氏が就任となれば驚きはなく、市場の反応は限定的だろう。
 以上勘案すれば、一方に牽引するドライバーとなる材料には欠け、ドル円はレンジ相場を想定する。

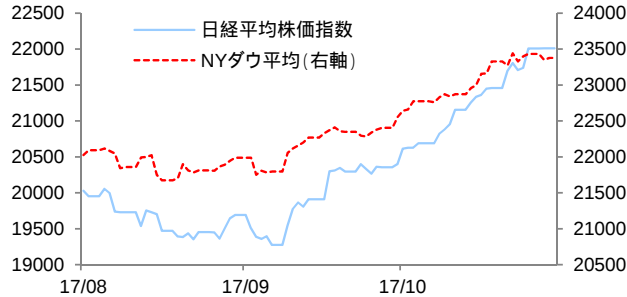
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	米ISM製造業景況指数	9月	58.1	60.8	58.8
10/4	米ISM非製造業景況指数	9月	55.5	59.8	55.3
10/5	米貿易収支	8月	-\$42.7B	-\$42.4B	-\$43.6B
10/6	米雇用統計	9月	80K	-33K	169K
10/13	米消費者物価指数(前月比)	9月	0.6%	0.5%	0.4%
10/13	米小売売上高(前月比)	9月	1.7%	1.60%	-0.1%
10/22	衆院投開票	-	-	-	-
10/27	米GDP(年率/前期比)	3Q	2.6%	3.0%	3.1%
10/31	日銀金融政策決定会合(政策金利)	9月	-0.10%	-0.10%	-0.10%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ドル・ブル (7名、111.00～117.00、中心112.00～116.50)

加藤	112.00 ～ 117.00	対他通貨(特に新興国通貨)でのドルキャリートレードの巻き戻しがドル円の下値を支えたと予想する。トランプ大統領は自身政策の目玉である税制改革はあきらめないだろう。
高田	112.00 ～ 116.00	FRBの金融引締めに向けた着実な取組姿勢に変化はなく、堅調な米経済指標や要人発言を背景にドルがサポートされる展開を予想する。新議長は未定だが方向性としては引締めであろう。金利差拡大が意識される局面でドルは底堅く推移するのではないかと。
佐藤	111.00 ～ 117.00	最近発表された一連の米経済指標は良好な内容が多く、来年以降の利上げ見通しに対する強気な見方が台頭する可能性もある。また、米税制改革案進展への期待に加え、FRB次期議長人事に対する不透明感払拭が見込まれる中、ドル/円は底堅い展開を予想する。
藤巻	111.00 ～ 116.50	指標は良好、企業決算好調、米政治期待高まり、FRBはバランスシート縮小そして利上げに向かっている。インフレがポイントとなるが、税制改革や堅調な原油市況はインフレ期待を押し上げる可能性もある。よってドル/円は堅調な推移を想定する。リスクはフロー主導でのリスク資産の調整か。
西谷	112.00 ～ 117.00	グローバルに株高が続いている状況下、年末にかけてドル円は底堅い展開と予想する。堅調な米経済指標を背景に12月利上げ織り込みは高水準を維持。米税制改革法案への期待も俄かに高まっており、トランプ政権への期待値が低いだけに進展が見られれば素直に好感する可能性が高い。
鶴田	112.00 ～ 116.00	足許の注目は次期FRB議長人事。指名内容によってドル円は上下方向どちらの反応も考え得るところ。しかし何れの候補者も金融政策正常化路線の継続が予想され、足許の米経済指標も堅調な内容が散見される中、ドルが一方的に売られる展開は考え辛い。今月のドル円は底堅い展開を基本線としたい。
大熊	112.00 ～ 116.00	足元の米経済指標は堅調な内容のものが多く、次期FRB議長に誰が指名されても、12月の追加利上げはほぼ確実と見られている。緩和を継続している日銀との金融政策の方向性の違いや金利差拡大の思惑もあり、底堅い推移になると思われる。

■ ドル・ベア (4名、108.00～115.00、中心108.50～114.75)

山下	108.00 ～ 114.00	トランプ政権の税制改革は税収減になることを考えると必ずしもドル買いとは言えない。直近の経済指標の停滞もハリケーンの影響による一時的なものとは片付けづらく、12月利上げは見送られる可能性も。ドル売り圧力は強まると予想。
矢野	110.00 ～ 115.00	米利上げ観測や次期FRB議長人事、税制改革は、目先の材料としては新味に欠けることからさほどの材料とはならず。北朝鮮リスクや日本株の反落に伴うリスクオフムードの高まりなど、センチメント悪化に繋がる材料に注意したい。
岡本	108.00 ～ 114.50	ファンダメンタルズは底堅いものの、パウエル氏が次期FRB議長に任命された場合や、米税制改革案で法人税の段階的引下げが採用された場合、先月期待感先行で上昇したドルの重石となろう。新規のドル買い材料にも乏しく上値の重い展開を予想する。
森谷	109.00 ～ 115.00	先月中旬以降、米税制改革への期待感の高まり等からドル/円は上昇するも114円台定着には至っていない。12月利上げの織り込みが既に相応に進んでいることを勘案すると、更なるドル買いには来年以降の利上げ期待が高まる必要があるそう。今月は経済指標を見極める段階となり、伸び悩む展開を予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1300 ~ 1.1900
EUR/JPY 128.00 ~ 134.00

国際為替部 為替営業第二チーム 佐藤 雅英

■ 先月の為替相場

10月のユーロ相場は、レンジ内で推移した後、ECB政策理事会後に下落した。

月初、1.18台前半でオープン。スペインのカタルーニャ自治州が週末に決行した独立を問う住民投票で約90%が独立を支持したことが明らかになると政局不安からユーロ売りが強まり、3日にかけて1.16台後半まで下落。しかし、同レベルでは押し目買い意欲もあり、4日にかけて1.17台後半まで上昇した。5日には、ECB政策理事会(9月7日開催)の議事要旨で、ユーロ高に対する懸念が明らかになったことや、6日の米9月雇用統計が良好な結果となったこともあり1.16台後半まで下落した。

9日は、ECB専務理事が量的緩和の縮小開始に前向きな発言をしたことなどを背景に1.17台半ばまで上昇。10日には、カタルーニャ自治州の首相が独立宣言を一時保留し、混乱回避の為に中央政府との対話を提案したこと、1.18台前半まで続伸した。11日は、FOMC議事要旨公表後にドル売り優勢となり、12日にかけて月高値1.1880まで上昇。その後は英国のEU離脱交渉に係る思惑を背景にユーロ/ポンドが急落すると、ユーロも連れ安となり、13日にかけて1.18台前半で推移した。

16日は、「カタルーニャ自治州のプッチデモン首相がラホイ首相への書簡で独立宣言について明確に回答せず」との報道を受け不透明感が強まったことや、次期FRB議長がタカ派とみられるテイラー氏やウォーシュ氏になるとの思惑が高まり、18日にかけて1.17台前半まで下落。19日には欧米株が徐々に底堅さを取り戻し始めると、1.18台半ばまで急反発したが、20日になると米税制改革への期待が高まり、1.17台後半まで下落した。

23日は、カタルーニャ自治州の独立問題への懸念から1.17台前半まで下落。24日は、米税制改革案に関するヘッドラインを受けたドル売りに1.18手前まで急上昇すると、26日にかけて1.18台前半まで上昇した。その後は、ECB政策理事会の声明文で必要であれば拡大資産購入プログラム(APP)は継続されることが示されると1.17台半ばまで急落。会合後の記者会見においてドラギECB総裁がAPP終了後も現在の政策金利が相当期間にわたり据え置かれることを示唆すると1.16台前半まで一段安となった。27日もユーロ売り優勢となる中、カタルーニャ自治州の独立宣言が報じられると、月安値1.1574まで下落した。

30日は、一旦ユーロ売り圧力が緩和された局面も見られたが、31日にかけて上値重く推移し、1.16台前半でクローズ。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は、上値の重い展開を予想する。

先月26日に開催されたECB政策理事会では、政策金利を据え置く一方、資産購入プログラム(APP)について、2018年以降は月次購入額を半減(600億ユーロ/月 → 300億ユーロ/月)させた上で、購入期間を9か月延長し、2018年9月までとした。

また、必要であればインフレ目標に沿った持続的な物価上昇が見られるまでAPPを継続することや、見通しが悪化したり金融環境がインフレ目標に沿わない状況になった場合、APPを規模・期間の両面で拡充することとした。

加えて、償還日を迎える保有債券の再投資をAPP終了後も長期に渡り続けることを表明し、APP終了後の展望を示すことで、緩和的な環境が長期にわたり維持されることを示唆した。

政策変更の内容は市場が予想していた範囲内だったが、APPの終了時期を定めない「オープンエンド」であることが強調されたことで、総じてハト派と評価されユーロは急落する展開となった。

ただ、今回の決定がハト派と評価されたとしても、ECBによる異例の緩和策が出口に向かって進展を見せ始めたことは、ユーロの持続的下降圧力になるとは考えにくく、今般の決定を背景としたユーロ売り圧力は早晩緩和されると考える。

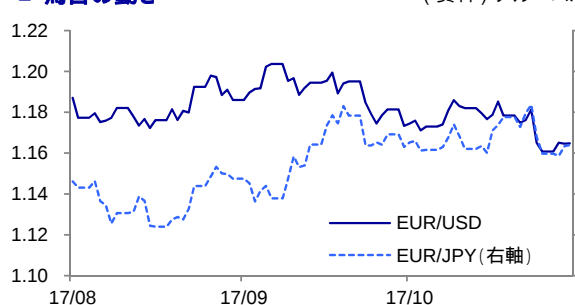
足許では、FRBによる利上げ及び資産縮小開始が金融正常化の観点でECBに先行しているものの、ECBにおいても従来の緩和規模が徐々に縮小されることは事実であり、ユーロ域内の国債利回り低下圧力が緩和されることを勘案すると、ユーロが一方的に下落することは考えにくい。

一方、好調な米経済指標を背景に米国では12月利上げの可能性が高まっていることやECB政策理事会での決定内容が想定範囲内に留まったことで、ユーロを積極的買い進める材料に乏しい。

こうしたことを勘案すると、11月のユーロ相場は上値の重い展開となりそうだ。なお、市場の注目は、FRBによる金融政策に移ることになり、11月の米経済指標等を手掛かりに年明け以降の金融政策を占うことになる。

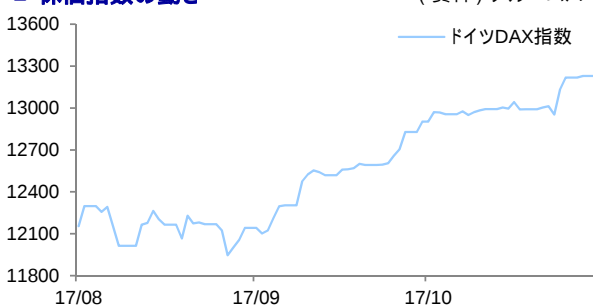
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/4	ユーロ圏小売売上高(前月比)	8月	0.3%	-0.5%	-0.3%
10/12	ユーロ圏鉱工業生産(季調済/前月比)	2Q	0.6%	1.4%	0.1%
10/17	ユーロ圏消費者物価指数(前月比)	8月	0.4%	0.4%	0.3%
10/17	独ZEW調査現状指数	10月	88.5	87.0	87.9
10/25	独IFO企業景況感指数	10月	115.1	116.7	115.2
10/26	ECB主要政策金利		0.0%	0.0%	0.0%
10/31	CPI予想(前月比)	10月	1.5%	1.4%	1.5%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (7名、1.1450～1.2050、中心1.1500～1.2000)

加藤	1.1550 ～ 1.1950	極右勢力の台頭やスペインの政治情勢、イタリア選挙等、経済問題ではない材料がユーロの重しであり、貿易黒字によるユーロ高圧力をキャンセルさせる状況に変化はなく、レンジ推移を予想する。
高田	1.1500 ～ 1.2000	底堅いユーロ相場を予想する。カタルーニャ情勢等、ネガティブ要因はあるものの、ユーロ圏の経済指標は概ね堅調であり、今後のECBによる金融引締めを意識したユーロ買いを背景にユーロはサポートされやすいと考える。
藤巻	1.1450 ～ 1.2050	ユーロについてはECB理事会後調整売りが入っているが、ECBが引き締めに向かっていることは事実。今回減額し9か月延長したが、その後は利上げも見えてくる。よって、ポジション調整の後はじわじわとユーロが上昇していく展開を想定している。
西谷	1.1500 ～ 1.2000	前回ECB理事会後に調整局面が見られたものの、売り一巡後は持ち直す展開を予想。ECBが正常化に向かう方向感是不変であり、中期的にユーロのサポート材料となるだろう。スペイン・カタルーニャ州独立問題も一時的な混乱に留まると考えており、長く尾を引く問題とは捉えていない。
森谷	1.1500 ～ 1.2000	ECB理事会後にユーロ売りが進んだものの、あくまで調整による一時的なものと考えている。ややハト派と受け止められた内容ではあったものの緩和縮小に向かっていくことには変わりはなく、下落したところでは相応の押し目買い意欲が見られ底堅い推移を予想する。
鶴田	1.1450 ～ 1.2000	10月ECB理事会では資産買入れプログラムの縮小をアナウンス。足許の注目イベントを通過し、やや材料出尽くし感となる中でユーロ相場はやや調整局面となったが、ECBが着実に正常化路線を歩む中でユーロ相場が一方的に下押しされる展開は考えづらく、基本的には底堅い展開を予想する。
大熊	1.1500 ～ 1.2000	10月のECB理事会でのハト派な姿勢が嫌気されたものの、想定範囲内であり、ユーロの下落は一時的なものと考え。カタルーニャ州の独立問題を発端としたリスク回避も一時的なものとして想定され、欧州経済の堅調さを背景にユーロの底堅さは続く予想する。

■ ユーロ・ベア (4名、1.1300～1.1900、中心1.1350～1.1850)

山下	1.1300 ～ 1.1700	ECB量的緩和縮小も必要に応じて拡大する選択肢を残すとしており、カタルーニャ問題を始めとする地政学的リスクの高まりによる経済への悪影響が懸念される中、量的緩和終了後の利上げまでには相応の時間を要するであろう。ユーロの上値は限定的。
矢野	1.1500 ～ 1.1800	10月ECB理事会でのドラギ総裁発言から一旦調整したものの、今後のテーバリングの状況やユーロ高に伴う物価安定への影響は引き続き注視が必要。当局者の通貨高に対する警戒感には依然として高いことから上値の重い展開を予想。
佐藤	1.1300 ～ 1.1900	先月実施されたECB政策理事会の決定がハト派となったことで、市場が決定内容を消化するには暫く時間を要するだろう。また、堅調な米景気を背景とした利上げ期待の高まりを背景にユーロは上値の重い展開を予想する。
岡本	1.1400 ～ 1.1900	ECB理事会で来年以降の資産購入額の減額こそ決定したが、スペイン・カタルーニャ州独立を巡る問題など、ユーロ圏諸国には問題が山積み。景気回復度合いもまだら模様の中、積極的にユーロを買い進めていく状況は引続き想像し難い。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2700 ~ 1.3400
GBP/JPY 144.00 ~ 153.00

欧州資金部 日比野 杏奈

■ 先月の為替相場

月初のポンドドルは1.33台後半で取引開始。週末に起こった米ラスベガスでの銃乱射事件やスペイン政情不安定などが意識される中でリスク回避的な円買いが先行し、ポンド円含むクロス円が下落。これにつられポンドドルは1.32台後半まで下落。5日に米長期金利が上昇した事や、英保守党大会でのメイ首相演説が不評だったことを受けBrexitおよび英政局先行き不安が高まるとポンドドルは1.31ちょうど近辺まで下落。翌6日はメイ首相の進退を巡る党内対立が表面化した事がポンド安要因となり、さらに米9月雇用統計での賃金予想以上の伸び、失業率の改善などが好感されドルが買われる中、ポンドドルは1.30台前半まで下落。

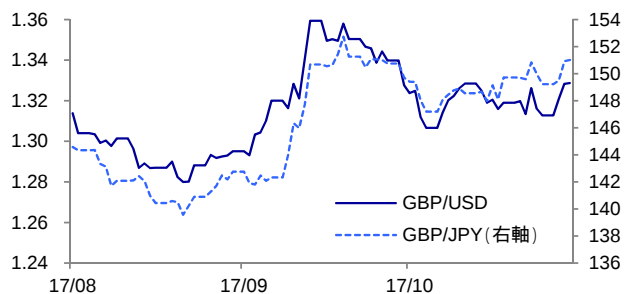
週明け9日にはボリス・ジョンソン外相更迭の一部観測記事が材料視され、ジョンソン更迭となればSoftBrexitの可能性が高まるとの期待からポンドドルは1.31台半ばまで値を戻した。10、11日は全般的なドル売りの流れを受けポンドドルは1.32台まで続伸。12日、バルニエEU離脱主席交渉官より「離脱交渉は行き詰まっている」「将来の通称条件についての交渉開始は提案できない」という発言を受けポンドドルは一時的に1.31台前半まで下落したものの、最終的には1.32台半ばまで回復し、翌13日は1.33台まで続伸。

週明け16日は1.33ちょうど近辺で取引開始し、米10月NY製造業況指数の強い結果を受けたドル買いを背景に1.32台半ばまで下落。17日には新たに英中銀MPCに加わったラムズデン副総裁、テンレイロ外部委員のハト派的な発言を受け利上げ観測がやや弱まり、1.31台まで下落。18、19日は1.31台半ばから1.32台前半でもみ合いとなり、20日はアジア時間中に1.30台後半まで下落したものの、欧州時間中にBrexit交渉の進捗への期待感からポンドが全般的に買われ、ポンドドルは1.31台後半まで値を戻した。

週明け23日は1.31台後半で取引開始。24日はアジア時間中に1.32台前半まで上昇したものの、トランプ政権による法人税の大幅減税を中心とした税制改革への期待からドルが上昇し、ポンドドルは1.31台前半まで下落。25日は英7～9月期GDP(前期比)が市場コンセンサスより強い結果となるとポンドドルは1.32台半ばまで上昇。

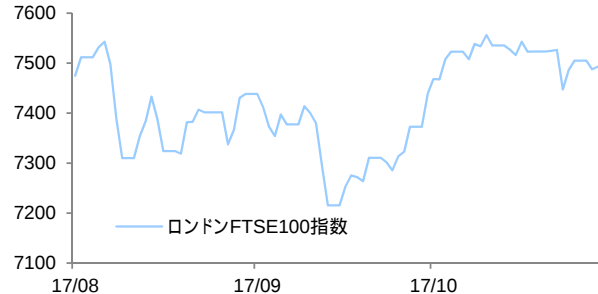
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	製造業PMI	9月	56.2	55.9	56.7
10/3	建設業PMI	9月	51.1	48.1	51.1
10/4	サービス業PMI	9月	53.2	53.6	53.2
10/10	鉱工業生産(前年比)	8月	0.9%	1.6%	1.1%
10/10	製造業生産(前年比)	8月	1.9%	2.8%	2.7%
10/17	消費者物価指数(前年比)	9月	3.0%	3.0%	2.9%
10/18	ILO失業率	6-8月	4.3%	4.3%	4.3%
10/19	小売売上高(含自動車/前年比)	9月	2.1%	1.2%	2.3%

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のセール(バーゲン)事情』
イギリスの大きなセールは基本的に夏、冬で一回ずつ。特にロンドンでは全般的に物価が高く、個人的にセールの時しか衣類は絶対に買いません。昨年から続いているポンド安を受け、ユーロ圏からロンドンに買い物目当てで来る観光客も増えており、今年の夏のセール中のOxfordStreet(ロンドン中心部のショッピングエリア)は人でごった返していた。人ごみが疲れるので、セール期間中のOxfordStreetは基本的に行かないようにしている。

イースター前はヒヨコ、うさぎ、タマゴの形をしたチョコ、お菓子がそこらじゅうで売られており、イースターが終わった瞬間にイースター関連のお菓子が処分セールとなる。

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7550 ~ 0.7800
AUD/JPY 85.50 ~ 89.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 山口 美紀

■ 先月の為替相場

10月の豪ドルは3か月ぶり安値0.7625を付けた。

2日、豪ドルは0.78半ばでスタート。翌日の豪準備銀行(RBA)理事会では政策金利が据え置かれ、RBA声明文も前回9月のものを踏襲する形となり、サプライズは無かったが、豪ドルは0.77後半に下落。しかし、豪ドル売り一巡後、次期FRB議長についてハト派(金融引き締め消極派)なパウエルFRB理事が有力と報道されたことから、ドル売り進行。豪ドルは0.78半ばに反発した。5日、米下院で2018年予算案が可決され、ドルが買い戻され、豪ドルは0.77後半に下落。翌日、良好な米9月賃金上昇率と米9月失業率を受けて、豪ドルは0.77前半に下落。

9日、日米祝日のため市場参加者少なく、豪ドルは0.77後半で揉み合い推移。その後、世界の堅調な株価を背景に、リスク通貨の豪ドルは0.78前半にじりじりと上昇。13日、予想比下振れした米9月消費者物価指数(CPI)を背景に、ドル売りが進み、豪ドルは10月高値0.7898を付けた。17日、RBA議事録では、「利上げは国内経済の景気動向次第だ」と示され、RBAは海外からの利上げ圧力に屈しない姿勢が強調された。ややハト派な発言を受けて、豪ドルは0.78半ばに下落した。20日、米上院で2018会計年度予算の大枠となる予算決議案が可決。ドル買いが進み、豪ドルは0.78前半に値を下げた。

翌週、米予算案可決やタカ派(金融引き締め積極派)なスタンフォード大のテイラー教授が次期FRB議長になるとの観測から、米債利回り上昇。ドル買いが進み、豪ドルは0.77後半に下落。25日には豪7~9月期CPIが前年同期比+1.8%上昇、RBAが重視する基調インフレ率(CPIトリム平均値と加重中央値の平均値)は前年同期比+1.85%と、RBAのインフレ目標(2~3%)を下回り、豪ドルは0.76後半に下落。27日、豪副首相ら5人の議員失職、更に豪与党が過半数割れとなり、豪ドルは3か月ぶり安値0.7625を付けた。その後、豪ドルは0.76台での揉み合いが続き、0.76半ばで越月した。

■ 今月の見通し

11月の豪ドルは上値の重い展開を予想する。

先月のRBA理事会やRBA議事録では、豪州経済の各要因を考慮した上で、持続的な成長を支え長期的なインフレ目標を達成するためには政策金利は据え置きとするのが妥当、利上げは国内経済の景気動向次第と強調された。また、先月発表された豪7~9月期CPIもRBAのインフレターゲットを下回っている。世界の主要中央銀行が相次いで利上げを実施もしくは検討する中、RBAは政策金利を史上最低の1.5%に当面据え置くことが予想される。また、先月は豪副首相ら5人の議員失職と豪州政治不安も高まった。

一方、米国では予算案可決、更に次期FRB議長がタカ派なテイラー教授になるとの観測、12月利上げ織り込み進行等から、米債利回りが上昇している。米2年債利回りは約9年ぶりの高水準、米10年債利回りも5月と7月に押さえられていた2.4%を上抜けた。ここ最近発表される米経済指標はインフレ指標を除けば堅調な米経済を示唆するものが多く、ドル買いが入りやすい地合いと考える。

上記理由より、11月の豪ドルは下落圧力がかかりやすい。しかし、テクニカル的には、豪ドル0.77以下はやや売られすぎの水準になっている。日足の200日移動平均線は0.7696、「買われすぎ・売られすぎ」を判断するオシレーター系指標のボリンジャーバンドにおいて、下限は0.7640に位置する。また、年初来の安値(0.7165)と高値(0.8125)を結んだフィボナッチ分析における半値は0.7645となっている。11月の豪ドルは上値が重い、下落スピードは10月と比較すると緩やかになろう。

11月の重要イベントは以下を考えている。2日、豪9月貿易収支、3日、豪9月小売売上高、7日、RBA理事会、15日7~9月期賃金上昇率、16日、10月豪雇用統計。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の当地のセール(バーゲン)事情』

*Boxing Day Sale

一番ディスカウント率が大きいと言われている、毎年12月26日のクリスマス翌日、ボクシングデーセール。豪州のクリスマスは夏なので、夏物がメインだが、この日はショッピングセンターも買い物客でごった返し、人気店は開店待ちの列ができる。

*Summer Sale

ボクシングデーから1月終わりくらいまでの間は、サマーセールと称して、夏物のセールが続く。セール終わりに連れてより安くなる傾向あり。

*End of Financial Year Sale

豪州会計年度が7月から6月までになっているので、6月に小売業が一斉に在庫処分走る、6月のセール。この時期は冬物が一斉に値下げされる。

*Click Frenzy Sale

2012年より始まったサイバー・マンデーの豪州版。毎年11月に行われるオンラインショップの大規模セール。

2017年は11月14日SYD7pmスタート。

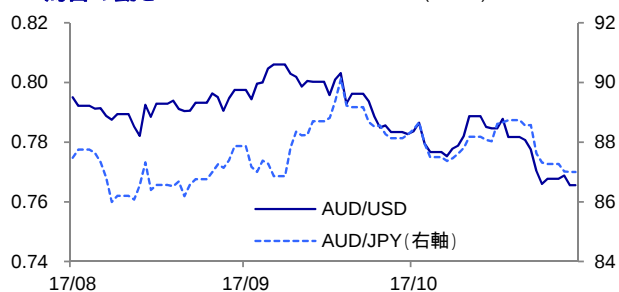
*出国時の旅行者消費税返金申請

豪州消費税(GST)は10%。一つのお店で300ドル以上買った物をしてから、60日以内に買ったものを持って出国する場合は、消費税の返金を受けることができる。空港の出国のフロアに「Tourist Refund Scheme」の施設があるので、買ったものとレシート、パスポート、出国の航空券を持って申請。買ったものは、豪州国内から持ち出すことが前提。服などは、身につけていても構わない。

上記が豪州の主要セールになります。お客さま皆様も、リテールセラピー(retail therapy)したくなったら、弊行にお電話を！豪ドル、3か月ぶり安値！絶賛セール中です！！

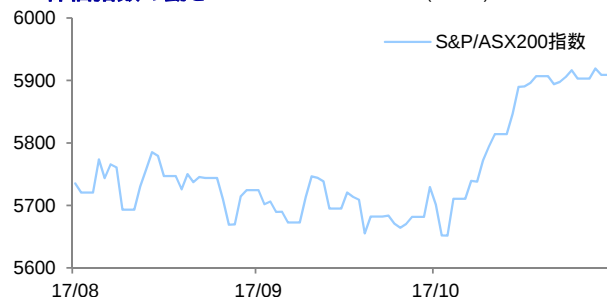
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	建設許可件数(前月比)	8月	1.0%	0.4%	-1.2%
10/3	RBA政策金利		1.5%	1.5%	1.5%
10/5	貿易収支	8月	A\$850M	A\$989M	A\$808M
10/5	小売売上高	8月	0.3%	-0.6%	-0.2%
10/12	住宅ローン承認件数(前月比)	8月	0.5%	1.0%	2.8%
10/17	RBA議事録				
10/19	雇用者数	9月	15.0千人	19.8千人	54.2千人
10/19	失業率	9月	5.6%	5.5%	5.6%
10/25	CPI(前年比)	7-9月	2.0%	1.8%	1.9%
10/27	PPI(前年比)	7-9月	-	1.6%	1.7%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2700 ~ 1.3100
CAD/JPY 87.00 ~ 90.00

グローバルマーケッツ業務部カナダ室 那須 絢子

■ 先月の為替相場

10月のUSD/CADは1.2511でオープン。

2017年上半年、市場の予想を大きく上回る成長を見せ、カナダ中央銀行による2会合連続の利上げに導いたカナダ経済は、9月末に発表された7月GDPの結果が示すように、下半期に入り成長率の鈍化が見られるようになる。

10月の重要経済指標第1弾である5日の8月カナダ貿易収支は、非エネルギー部門での不調が2%の輸出減へと繋がり赤字幅が拡大、結果は予想の前月比-2.60bを上回る-3.41bの赤字となった。一方、同時に発表された8月貿易収支は予想の-42.7bからやや赤字幅を縮小し-42.4bだった。発表後はカナダドル売り、USDドル買いが進みUSD/CADは1.2552まで急伸。翌日の9月雇用統計は米・加共に予想を下回るも両国共に平均時給が上昇したことが好感されUSDドル、カナダドルは大半の主要通貨に対し買われた。カナダドルは対USDドルでやや上昇し、前日の下げ幅を縮小することとなった。

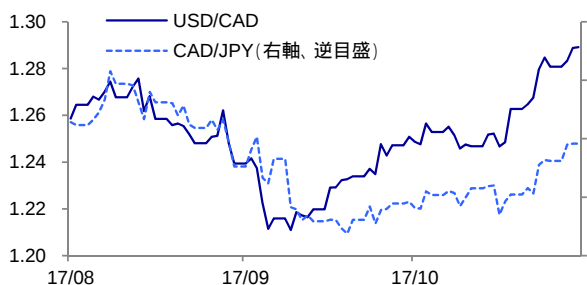
10月2週目は10日にIMF(国際通貨基金)が2017年、2018年のカナダの経済見通しを上方修正したことや、11日発表のFOMC議事録の内容で低迷するインフレが一過性の要因だけではない可能性があること示したためにUSDドル売り、カナダドル買いが進み12日には1.2433までカナダドル高が進んだ。

後半は16日、ボロズ加中銀総裁がIMFの会合にて下半期のカナダ経済見通しは「緩やかな成長」になると発言しカナダドル売りが優勢になった。その後20日に発表された9月消費者物価指数(CPI)、8月小売売上高は共に予想を下回る結果で、発表後はカナダドル売りが更に進むこととなった。25日、カナダ中銀は翌日物貸出金利の目標水準を1.00%に据え置いた。今後の利上げはカナダドルと金利上昇が経済にどのような影響を与えるか注視しながら検討、と慎重な姿勢を示した。利上げ観測が更に後退しカナダドルは急落、USD/CADは1.28台を上抜けし7月以来の最安値を記録。

31日発表の8月国内総生産(GDP)は鉱業やエネルギー部門が落ち込み前月比-0.1%と予想外のマイナス成長となった。発表後、カナダドルは急落しUSD/CADは7月以来初めて1.29ドル台を上抜けし1.2915まで上昇した。

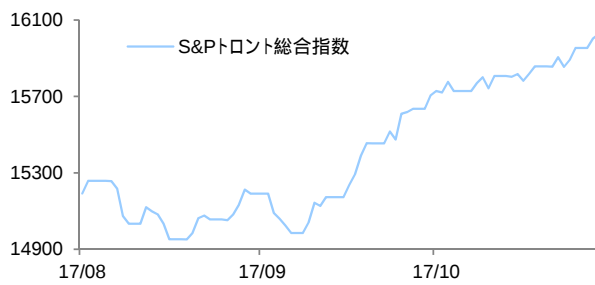
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のセール(バーゲン)事情』

カナダ最大のセールは、アメリカの感謝祭(11月第4木曜)翌日のブラックフライデーと、その翌月曜日のサイバーマンデーに始まり、そしてクリスマス翌日のボクシングデーでクライマックスを迎える。年間行事で最もクリスマスを大事にする北米の人達が家族や友人へのクリスマスプレゼント購入の為に財布の紐を緩めるこの時期に大規模なセールが行われるのは当然と言える。

ブラックフライデーはカナダでは休日でないのと、米国に比べ規模が小さいせいも、宣伝の割にはそんなに盛り上がりがない。しかしお隣のアメリカではブラックフライデーのウォルマートやメイシーズで買い物客が取組み合いのけんかをするなどの報道を毎年耳にするぐらいなのでかなりの目玉イベントのようだ。米国のセール内容はカナダに比べ格段に良いとよく聞くのでそういうのも理由にあるのだろう。

サイバーマンデーはオンラインショッピング最大のセールイベントで、ネットショッピングが年々消費者に浸透するなか確実に売上げを伸ばしている。パソコンやモバイル機器の売上げが大半を占めており、2016年度の売上げは34億5000万ドルで前年比12%の増加を記録したとか。ちなみに私もその売上げに貢献した消費者である。

クリスマスも終わり、売れ残り商品の一掃セールの感覚で開催されるボクシングデーセールはブラックフライデーよりも値引率が大きく、カナダのモールや電器店はどこも多くの買い物客で賑わう。数限定の目玉商品などが出るのもこの時で、開店前の店に長蛇の列が並ぶことも。

さて、今年はどのタイミングで買い物をしようか…。でも最近あまりどのセールを見てもお得感が無く、購買欲が沸かないというのが本音なのだが。

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	国際商品貿易	8月	-2.60 b	-3.41 b	-3.04 b
10/6	雇用ネット変化	9月	12.0 k	10.0 k	22.2 k
10/6	失業率	9月	6.2%	6.2%	6.2%
10/18	製造業売上高(前月比)	8月	-0.30%	1.60%	-2.60%
10/20	消費者物価指数(前年比)	9月	1.70%	1.60%	1.40%
10/20	消費者物価指数コア(前年比)	9月		1.80%	1.70%
10/20	小売売上高(前月比)	8月	0.50%	-0.30%	0.40%
10/25	カナダ銀行翌日物貸出金利		1.00%	1.00%	1.00%
10/31	GDP(前年比)	8月	3.6%	3.5%	3.80%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1100	~	1140	(注)100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	9.80	~	10.40	
	JPY/KRW	9.60	~	10.20	

ソウル資金室 下山 泰典

■ 先月の為替相場

10月のドル/ウォンは下落(ウォンが対ドルで上昇)。
10月のドル/ウォンは、チュソク(旧盆)明けの10日からオープンし、1142.50レベルで取引を開始。この日は北朝鮮の朝鮮労働党創設記念日であり、同国が何らかの挑発行動に出る可能性が意識されていたが、結果として何らも起こらなかったため、ウォン買い圧力が高まった。その後はチュソク前の取引水準である1120~1140に収斂する動きとなった。19日には米国で2018会計年度予算の大枠となる予算決議案を可決したが、ドル/ウォン相場への影響は限定的となった。

なお、10月で注目だったのは19日の韓国中銀(BOK)の金融通貨委員会。足元のファンダメンタルズが良好な韓国にあって、中銀の次のアクションとして利上げが目されている中、景気判断や総裁の発言等に注目が集まっていた。結果として、景気判断は上方修正され、総裁からも将来の利上げを展望する発言があり、さらには利上げ票を投じる委員も出てきた。地政学的リスク等への懸念もあったためか、為替市場では大きなインパクトとはならなかったが、金利市場は11月の利上げも視野に入れたとも言える動きを見せており、また20・23日と韓国株式市場への外国人投資家による資金流入も加速するなど、ウォンやKOSPIを相応にサポートする材料だったと言える。

その後も結局1120~1140のレンジで推移となったが、26日の韓国7-9月期GDPは前期比+1.4%・前年比+3.6%と高水準かつ市場予想を大きく上回る結果となり、市場はウォン買い方向に傾いた。27日の米7-9月期GDP(1次速報)は前期比/年率+3.0%とこちらも市場予想を大きく上回ったが、翌営業日である30日のドル/ウォン相場への影響は軽微だった。その後、31日には米迎撃ミサイル(THAAD)配備以来冷え込んでいた中国と韓国との関係において、両国があらゆる分野での協力や交流を正常化させることで合意したこと等を背景に一段とウォン高となり、ドル/ウォン相場は今月の安値(ウォンの高値)となる1120.00まで下落し、1120.40レベルでクローズした。

■ 今月の見通し

11月のドル/ウォン相場は、基本的には上値の重い(ウォンの底堅い)展開を予想しているが、北朝鮮を巡る地政学的リスクの高まりによる急騰(ウォンの急落)には引き続き警戒したい。

10月に行われていた米韓の軍事演習や中国の共産党大会、また北朝鮮の朝鮮労働党の創設記念日等でも、同国の目立った挑発等はなく、地政学的リスクは一旦後退している印象。かかる中、マーケットの焦点として韓国経済ならびに韓国中銀(BOK)による今後の利上げの可能性が台頭してきたと感じている。10月の金融通貨委員会(韓国中銀が政策金利などを決定する会合)では景気判断が上方修正され、中銀総裁からも将来的な利上げを展望する発言があった。さらには利上げ票を投じる委員もあり、特に金利市場においては今月の利上げの可能性が俄かに意識されている状況だ。先月発表された韓国7-9月期GDPは前年比+3.6%と高い水準であり、IMFが10月に公表した世界経済見通しで2017・18年のGDP成長率を+3.0%とするなど堅調推移が見込まれる韓国経済。地政学的リスクの高まりから一旦は流出が確認された外国人投資家のフローも徐々に戻ってきており、ドル/ウォン相場の基本線はウォン買い優勢とみている。

ただし、冒頭にも書いたとおり、地政学的リスクが高まる可能性は常に意識する必要がある。今月はトランプ米大統領によるアジア歴訪が予定されており、7日には米韓首脳会談も予定されている。米朝の舌戦が依然冷めやらぬ中、北朝鮮がさらなる挑発行動に出る可能性も否定はできず、その場合のウォン売り圧力は不可避と思われる。

以上を勘案、ドル/ウォン相場の基本線は上値重くウォン買い優勢と考えているが、ウォン急落の可能性にも常に注意を払っておきたい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

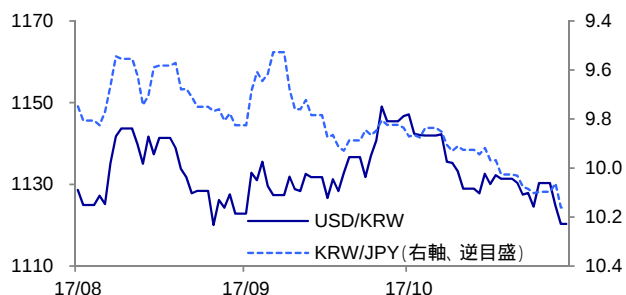
『当地のセール(バーゲン)事情』

セールと聞くと、まず頭に浮かぶのは「年中やっているな～」というのが私の個人的な印象。韓国では特に女性はバーゲンセールが大好き(日本も同じでしょうか)。季節終わりの夏物・冬物には多くの人が集まり、激安品を狙った「ハンター」達があらゆる情報を用いてお得を享受しています。

しかし、やはり不思議なのは、セールではももとの価格から40~50%オフといった破格な値段で売られていること。本来の値段の信憑性がかなり疑わしい。確かに、50万ウォンの服が25万ウォンに買えるの嬉しいですね。でも、ちょっと待てば25万ウォンになる服を本来の値段で買って帰る場合、そんな私を店員さんは笑って見ているのではないかと、どうしても気になってしまいます。(李サンラク)

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/1	輸出(前年比)	9月	25.0%	35.0%	17.4%
10/1	輸入(前年比)	9月	20.6%	21.7%	14.2%
10/18	失業率(季節調整済)	9月	3.70%	3.70%	3.80%
10/19	BOK金融通貨委員会	-	1.25%	1.25%	1.25%
10/26	GDP(前期比)	3Q	0.9%	1.4%	0.6%
10/1-9	秋夕(チュソク、旧盆)	-	-	-	-

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 29.90 ~ 30.70
TWD/JPY 3.60 ~ 3.82

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

10月のドル/台湾ドル相場は、底堅く推移。

月初30.309でオープンしたドル/台湾ドルは、新規材料が比較的小さい中、実需のフローを受けてドル買い台湾ドル売り優勢で推移。10/3にかけては、10月の高値となる30.475まで上昇した。しかしながら、その後は、米金利の低下を受けてドルの上値が重くなると、輸出企業の台湾ドル買いフローも相俟って上げ幅を縮小。海外時間に米9月雇用統計を控えていることもあり、10/6にかけては上値の重い推移が継続した。

台湾の連休明けの10/11は、連休中のドルの軟調な推移を受けて、取引序盤よりドル売り台湾ドル買いが先行。株式市場での外国人投資家の資金流入も台湾ドル買いをサポートし、一時30.214まで下落。10/12-13にかけてはこの流れが続き、約3週間ぶりの台湾ドル高水準となる30.1台へ下落。

月後半に入っても、ドル/台湾ドルは、株式市場への海外資金の流入を背景にドル売り台湾ドル買いが先行。10/16には30.130の安値をつけたが、その後は新規材料が少ない中、下値は限定的となり、次期FRB議長人事に関して、イエレンFRB議長よりもタカ派的とされるテイラー・スタンフォード大学教授がトランプ大統領との面談で好印象を与えたとの報道をきっかけに、米金利が上昇したことを受けて、ドル/台湾ドルもドル高基調の推移となった。

月末にかけては、次期FRB議長人事の結果待ちで、様子見姿勢が強まる中、30.2台を中心とする小幅なレンジ内での推移が続くも、米上院に続いて、下院でも2018年度予算決議案が可決されると、税制改革進展への期待感も広がり、ドル高が進行。10/27には一時30.3台へ載せる場面もみられた。

■ 今月の見通し

11月のドル/台湾ドル相場は、底堅い推移の継続を見込む。

10月に発表された台湾の経済指標をみると、9月の輸出額が前年比+28.10%と大幅な伸びとなり、12か月連続でのプラス成長を記録。輸出受注も市場予想の前年比+8.90%こそ下回ったものの、同+6.90%と14か月連続のプラス成長。輸出額、輸出受注ともに単月ベースでは過去最高を更新しており、引き続き台湾の主要輸出品である電子部品を中心に、輸出の好調さが維持されていることを確認できる内容となった。なお、9月の消費者物価指数(CPI)は前年比+0.50%と前月の同+0.96%から伸びが鈍化した。

11月の注目材料は、米税制改革に関する議論の行方や台湾の株式市場における外国人投資家の資金の動向か。

米議会では、2018年度予算決議案が10/19に上院で可決されたことに続き、10/26には下院も通過。今後は、年内の税制改革実現に向け、税制改革法案に関する議論が本格化するものとみられる。税制改革については、市場での織り込みはまだ十分に進んでいないとみられ、審議に進展がみられれば、ドル高圧力が高まることも想定される。

一方、台湾株における外国人投資家の資金については、9月に620億台湾ドルの大幅な資金流出がみられたものの、10月に入り、再び流入超に転じ、株高をけん引している。10月は、430億台湾ドルを越す買い越しを記録しており(10/27時点)、5月以来の水準となっている。この傾向が今後も続けば、年前半同様に台湾ドル高圧力が強まりやすい状況となる可能性もあるか。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のセール(バーゲン)事情』

台湾のバーゲンといえば、秋の週年慶と冬の春節前のセールになります。

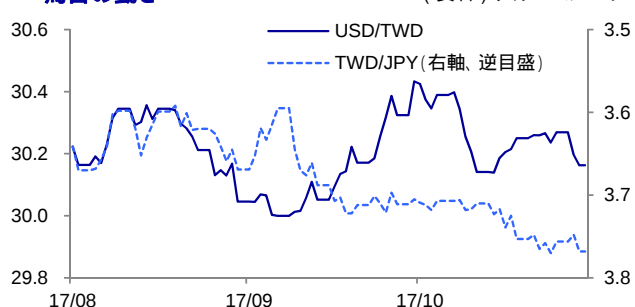
週年慶は、日本でいう百貨店の創業祭バーゲンにあたります。開催時期は百貨店によって異なるうえ、同じ百貨店であっても店舗ごとに期間が異なりますが、毎年10-11月にピークを迎えます。年に一度の大バーゲンということで百貨店側の力の入れようも半端ではなく、この時期だけのお得なセットや景品のプレゼントなどで今年も大変賑わっております。

春節前のバーゲンは、毎年1月ごろから始まり、春節にかけて開催されますが、秋冬物の衣料品などが1年で1番安くなるとも言われております。一方、春節期間中は親戚や知人を自宅でもてなす機会も増えるため、通常に比べ、食材などは高くなることもあるようです。

そのほか、季節を問わずに台湾でよく行われる安売りの方法のひとつが「買一送一」です。「買一」=商品を買えば、「送一」=1つ無料でサービスするという意味で、コンビニやスーパーをはじめ、多くのお店で使われております。「買一」の部分は商品によって異なり、「買三」になったり、「買五」になったりします。

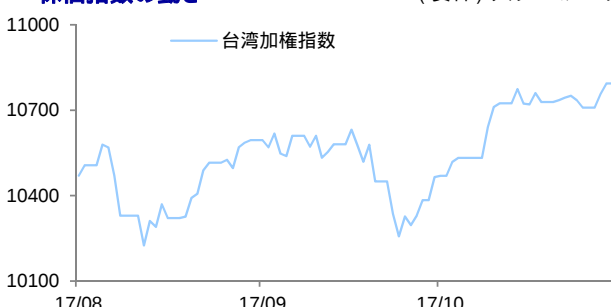
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	外貨準備高	9月	-	447.22B	446.43B
10/6	消費者物価指数(前年比)	9月	0.90%	0.50%	0.96%
10/11	輸出(前年比)	9月	13.60%	28.10%	12.70%
10/11	輸入(前年比)	9月	9.80%	22.20%	6.90%
10/11	貿易収支	9月	5.86B	6.69B	5.71B
10/20	輸出受注(前年比)	9月	8.90%	6.90%	7.50%
10/23	失業率	9月	3.80%	3.71%	3.76%
10/23	鉱工業生産(前年比)	9月	4.50%	5.24%	3.25%
10/31	GDP(前年比)	Q3	2.00%	3.11%	2.13%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7900 ~ 7.8200
HKD/JPY 14.10 ~ 14.69

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【10月の香港ドル直物相場】

ドル／香港ドルは香港ドル及び米ドルの金利差が縮小したことや企業の新規株式公開に伴う香港ドル買いの動きを背景に、7.80水準付近まで香港ドル高が進行する展開となった。新規株式発行に伴う一時的な流動性の逼迫等から、ドル／香港ドルフォワードの1か月物及び3か月物は、▲27ポイントおよび▲127ポイント付近と前月末水準から上昇する展開となった。1年物については、前月水準の▲500ポイント付近から▲440ポイント付近と短期ゾーンに比べ上昇幅は限定的なものに留まった。

【10月の香港ドル金利市場】

企業の新規株式発行に伴う香港ドル買いの動きから、香港ドル市場の流動性は一時的に逼迫する展開となった。10月央には、HKMAが為替基金短期証券の追加発行を示唆したことから、香港ドル金利は一時的に上昇する局面を見せた。斯かる中、香港のHIBOR1か月物及び3か月物は、0.73%及び0.94%付近まで上昇したものの、HKMAからの追加発行は実施されなかったことで徐々に落ち着きを取り戻す動きとなった。LIBORとHIBORの1か月物及び3か月物の金利差は縮小し、約0.50%及び約0.43%と約0.10～0.15%程度縮小した。インターバンク市場の流動性を図る指標であるHKMAの当座預金残高は、約1790億香港ドルまで減少し2014年6月以来の水準まで低下した。

【10月の香港株式市場】

ハンセン指数は、中国共産党第19回全国代表大会を経て市場参加者からの中国及び香港市場に対するモメンタムが堅調に推移したことや、次期FRB次長に係る人事や米トランプ政権下における税制改革への期待感の高まり等から、米国株も最高値を更新する等グローバルな株高の流れも相俟って、一時約10年ぶりの水準となる28,799水準まで上昇する局面を見せた。その後は、調整売りの動きから一時下落する展開となるも、上昇トレンドは引き続き維持している模様。

■ 今月の見通し

【11月の香港ドル直物相場】

ドル／香港ドルの取引レンジは、7.795から7.830を想定する。香港ドル金利と米ドル金利の金利差の縮小や、中国共産党第19回全国代表大会を経て中国及び香港市場のモメンタムが堅調に推移していることに加え、香港株式市場の上昇等を鑑み、香港ドル市場からの資金流出圧力は引き続き和らぐものと想定する。米国でのFRBによる12月利上げについては市場は相応に織り込んでおり、米国の利上げに追随し香港ドル金利の引き上げも想定される中で、金利差拡大に伴う過度な香港ドル安への転換は想定し難い状況。

【11月の香港ドル金利市場】

HKMAの為替基金短期証券の追加発行により、HKMAの当座預金は減少し、流動性の逼迫から短期ゾーンを中心に香港ドル金利は上昇している。新規株式発行に伴う一時的な金利上昇には引き続き要注意。斯かる中、FRBによる12月における利上げが徐々に織り込まれつつある中で、米ドル金利上昇に追随する格好で香港ドル金利も徐々に上昇する展開となろう。加えて、HKMAが為替基金短期証券の追加発行を実施し、資金吸収を段階的に実施することで、香港ドル金利を徐々に引き上げていく可能性も想定したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の当地のセール(バーゲン)事情』

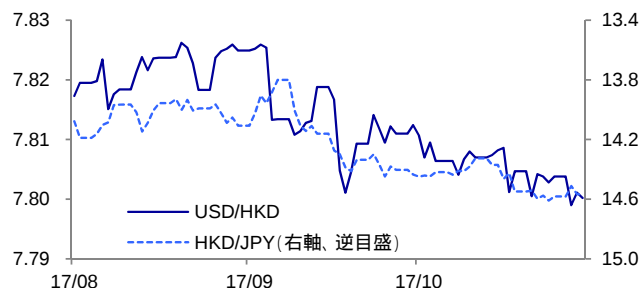
香港のバーゲン(クリアランス)セールは、通常クリスマスが終わった後に実施される他、旧正月後にも大規模なセールが開催されます。

また、最近では香港の祝日に加えて中国本土の祝日にあわせてセールを開催するショップが数多く散見されるようになり、中国本土からの観光客が相応に押し寄せてきているようです。

一方で、価格が最もリーズナブルになるのは、やはり旧正月シーズンのセールのようで、日本でもお馴染みの商品を我先にと取り合うような光景もしばしば見受けられますが、様々な人種(日本人、香港人、中国人、欧米人等)が一堂に集結する光景は香港でしか見られないかもしれません。

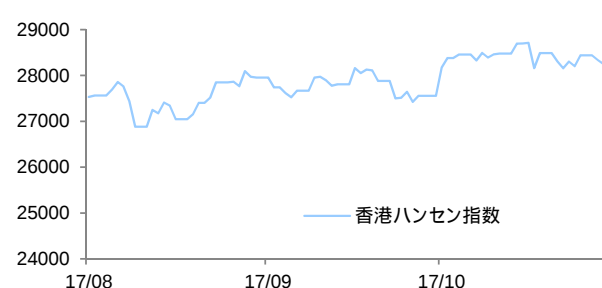
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	小売売上高(価格、前年比)	8月	3.50%	2.70%	4.00%
10/3	小売売上高(数量、前年比)	8月	4.30%	3.20%	4.50%
10/6	日経香港PMI	9月	-	51.2	49.7
10/9	外貨準備高	9月	-	\$419.2b	\$413.7b
10/19	失業率(季調済)	9月	3.10%	3.10%	3.10%
10/19	総合利率	9月	-	0.30%	0.30%
10/23	CPIコンボジット(前年比)	9月	2.00%	1.40%	1.90%
10/26	輸出(前年比)	9月	5.90%	9.40%	7.40%
10/26	輸入(前年比)	9月	5.00%	9.70%	7.70%
10/26	貿易収支(HKD)	9月	-38.5b	-44.7b	-35.5b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.4500	~	6.8500
	CNY/JPY	15.77	~	17.83
	100JPY/CNY	5.6400	~	6.2500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 馬場 一樹

■ 先月の為替相場

【為替相場】

10月のドル/人民元相場は、国慶節明けに一旦はドル安人民元高が進行するも、月後半にかけて巻き戻され6.66近辺までドル高人民元安が進行した。月初、国慶節期間中にスペイン・カタルーニャ自治州首相が即時独立の宣言を見送るなど欧州政治リスクが後退、ユーロを中心にドル安が進む中、国慶節明け以降は継続的にドル人民元仲値が人民元高方向に設定され、実勢相場も国慶節前の水準である6.62台から6.58割れまでドル安人民元高が進行した。その後、米株や日本株が上昇するなど堅調なリスク資産の動きや米予算案可決との報道を背景にドル高が進む中、ドル人民元は6.64手前まで上昇。18日から第19回共産党大会が開催されたが、その間のドル人民元は特段大きな動きはなく概ね6.64近辺とほぼ横ばい推移。党大会後、ドル買いの動きを背景に6.66近辺までドル高人民元安が進んだ。米国でFRB人事や税制改革等を控える中、引き続き堅調な米株式市場の動きやハト派と捉えられたECB理事会、及び米予算決議案の下院通過等を受けてドル高が進行していた。

【金利相場】

国慶節明けは中資系大手行が資金放出に転じ始めたことや、MLFによる資金供給が実施されたことから、市場の流動性は緩和し、短期セクターを中心に金利水準が大きく低下した。その後引き続き中資系大手行からの資金放出が継続的に見られる等緩和的な地合いが続く中、資金金利は安定的に推移したものの、月後半には納税に伴う資金調達ニーズの高まりや、一部中資系銀行からの資金放出ニーズ後退を背景に、O/N物中心に金利は小幅上昇となった。

■ 今月の見通し

【為替相場】

11月のドル/人民元相場は、株価動向及びドルの動きに警戒。足元米株及び日本株が堅調に推移する中、ドル高が進行中。ドル人民元もドル高の動きに沿って底堅く推移しているものの、ドルの動きに降られやすい状況下、リスク資産の巻き戻しによるドル安の動きには警戒。月初にはFOMCや雇用統計等重要指標が発表されるなど米国でのイベントも多く、イベント通過後のポジション調整の動きが出るか注視。10月の第19回中国共産党大会では改めて過剰投資及び過剰債務と共に債務圧縮の必要性が強調されており、当局者による政策についての発言等が出た際の相場の動きに注意。

【金利市場】

足許流動性は維持されている中、月前半は月末を越えて需給が緩むため、金利低下バイアスがかりやすいか。ただし、一連の政治イベントも終わり、中期的には当局が懸念している過剰債務問題の解消を企図し、金融政策が引き締めに転じる可能性もあり、要注意。

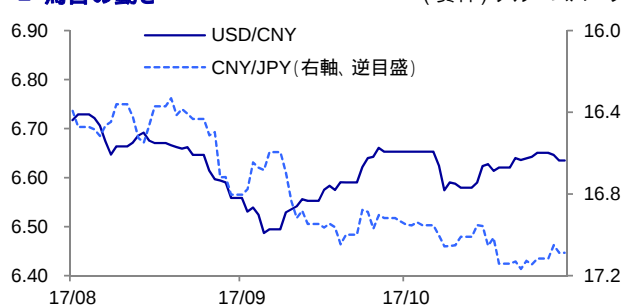
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のセール(バーゲン)事情』

中国で一番大きなバーゲンは、春節前後にあります。その他は5月1日の労働節や10月1日の国慶節前後など、季節の節目にあるようです。中国ではバーゲンのことを「打折(ダージョ)」や「ダーシュアイマイ」と言います。正確に言うと、「打折」はバーゲンやセールより割引の意味に近く、ショッピングモールなどで「打七折」の表記を見つけたら、これは「7割の値段で売ります」という意味です。よく日本人は7割引きと勘違いしやすいようです。また、よく見かける「買一送一」という表記。これは「1枚買ったら、1枚おまけ」という意味です。「満300減100」もよく見かけます。これは「300元以上買ったら、100元割引き」という意味です。「買一送一」は、対象商品の中にもう一枚欲しい商品があればお得感がありますが、欲しい商品がないともう1枚もらってもしょうがないですね。「満300減100」も、300元以上欲しいものがなく買わなかった場合、100元の割引が無いことになります。たくさん買えば、お得という中国のバーゲンは、割引を志向する日本人向きではないような気がします。

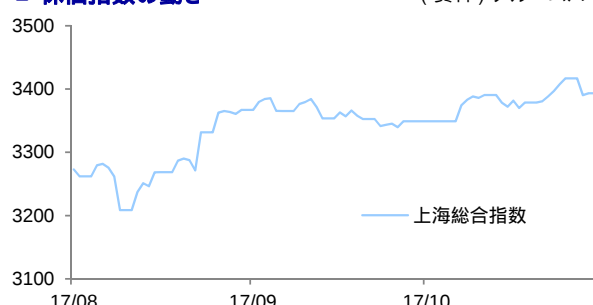
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/13	貿易収支(RMB建)	9月	266.1B	193.0B	286.5B
10/13	輸出(RMB建)(前年比)	9月	10.9%	9.0%	6.9%
10/13	輸入(RMB建)(前年比)	9月	16.5%	19.5%	14.4%
10/16	CPI(前年比)	9月	1.6%	1.6%	1.8%
10/16	PPI(前年比)	9月	6.4%	6.9%	6.3%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3550 ~ 1.3850
SGD/JPY 82.00 ~ 84.00

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

9月下旬のFOMCで米年内利上げがほぼ確実となったことで、年初から約9か月間に亘って続いていたシンガポールドル(SGD)高の流れが一服し、10月はSGD軟調基調の持ち合い相場となった。

月初SGDは1.35台後半でオープン。全般的なドル買戻しの流れに沿ってSGDが軟調推移した。第1週に発表された米経済指標が、4日の9月ISM非製造業景況指数、5日の8月耐久財受注、新規失業保険申請件数と軒並み好調だったこともドル買い戻しを後押し、SGDは利食いをこなしながら1.36台前半へ軟化。更に6日発表の9月雇用統計が、非農業部門雇用者数こそ前月比3万3千人の減少となったものの、失業率が低下、平均時給も予想以上に上昇し、全体的にポジティブな内容と受け止められたため、SGDは発表後に1.37手前まで続落した。しかし、その水準は8月中旬につけた直近の安値とあって利食いが持ち込まれ、1.36台半ば近辺まで戻して越えた。

第2週は、SGDの主要バスケット構成通貨である人民元やユーロが堅調推移したことで、一転して連日SGDが買い戻される流れとなった。中国共産党大会を翌週に控えて人民元が大幅高となったことや、スペイン・カタルーニャ自治州が独立を保留したことなどからユーロが反発したことで、13日のシンガポール金融管理局(MAS)通貨政策発表を控えたポジション調整が誘発され、12日には1.35近辺までSGDが反発した。

13日、MASは市場の予想通り、SGD名目実効レート(NEER)を上下どちらにも誘導しない中立スタンスを維持し、政策バンドの幅、中心値も変更しなかった。一部では引き締めスタンスへ変更にするとの見方もあったため、発表を受けて1.35台半ば近辺までSGD安に振れたが、同夜発表された米9月CPIが予想を下回ると、SGDも1.34台後半まで買い戻された。

第3週は、全般的なドル高の流れの中で、連日SGDが下落した。16日はタカ派と見なされているテイラー氏が次期FRB議長候補に挙がっているとの報道を受けてドルが買われ、また20日には米上院で2018年予算決議案が可決されたことで再びドルが上昇。SGDもこの流れの中で1.36台前半まで反落した。

第4週は、欧州中銀(ECB)理事会を控え、様子見ムードから週前半は1.36台前半の狭いレンジ内での揉み合いとなった。26日のECB理事会は量的緩和の縮小を決定したが、終了時期を指定しないなどややハト派的印象で、発表を受けてユーロが急落。この影響でSGDも直近の安値を抜いて1.36台後半まで下落し、3か月ぶり安値をつけた。

■ 今月の見通し

11月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD軟調推移を予想。ポジション調整からSGD安が加速する可能性も。

今年のSGD(対ドル)相場を振り返ると、年初に1.45台半ばの安値をつけた後は上げ下げを繰り返しながら一貫してSGD高トレンドが続き、9月に1.33台半ばの高値をつけた後、下落に転じた。その後10月に一旦買われたものの、9月の高値には届かなかったことで、SGD高一服感が広がっている。9か月間続いたSGD高トレンドの背景には、トランプ政権への期待感の剥落、米景気回復の心許なさから米利上げペースが緩やかになるとの思惑などがあつた。そして、9月のトレンドの反転には、FRBが当初の利上げペースを維持するとの見方が広がったことが影響していると思われる。また、紆余曲折を経ながらも米税制改革に向けて進展が見られ、今後トランプ政権が掲げてきた景気刺激策実現への期待感が高まっていく可能性を考えると、年末に向けて調整によりSGD安が加速するシナリオを警戒したい。

また、11月は多くのヘッジファンドの決算月であるため手仕舞いが出易く、それがきっかけとなり、相場が一方方向に動くことが多々ある。更に現状の1.36台後半は8月、10月に底値となった水準であり、何らかのきっかけでクレーンに下抜けすると、テクニカル的にもストップロスを誘発しやすい水準にある。SGDの実効レートは政策バンド内でSGD高寄り水準にあると推定されるが、シンガポール金融管理局(MAS)が10月の見直しで中立スタンス維持を決定し、少なくとも半年間はSGD高誘導を行わない予定のため、ドル以外の通貨に対してもSGD安余地があると言えよう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のセール(バーゲン)事情』

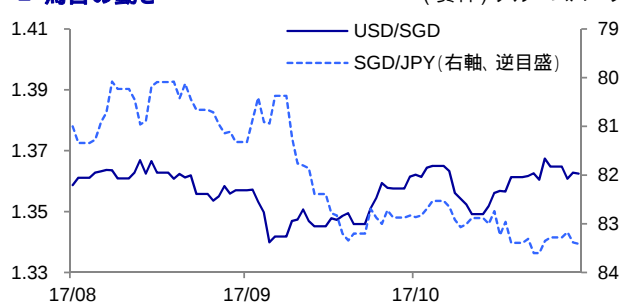
最近ネットで購入をする人が増え、また当地の賃貸コスト、人件費上昇のせいか、バーゲンセールは以前に比べて迫力に欠けるようです。常夏の国ですので、「夏物/冬物一掃セール」がある訳ではなく、メリハリの無いセールの常時やっているような気がします。

最近マンネリ化してインパクトは今ひとつながら、定期的に行われるセールもあるにはありまして、それが毎年6月頃行われるGSS(Great Singapore Sale)です。私は2003年に鳥インフルエンザSARS発生で観光業が打撃を受けた時、デパート、商店街などが一斉に大々的なセールをしたのがGSSの起源だと思っていました。しかし、実はそれ以前から官主導で小売協会と共に行ってきたものだそうです。日本で話題になるずっと前から「爆買い」が経済振興モデルの一つであり、官民タイアップしてシンガポールの成長維持のため、色々な事を試みてきたのだと改めて思いました。

インバウンドだけではなく、カジノ、医療・教育ハブ、女性や外国人労働者を取り込んだ労働力不足の解消と生産性向上、移民誘致による人口増加策など、日本より10年、20年前から、数十年先を見据えた政策を積極的に行ってきたところは、日本も参考にすべきだと思います。バーゲン事情からだいぶ横道に外れてしまいましたが。。。(鈴木教子)

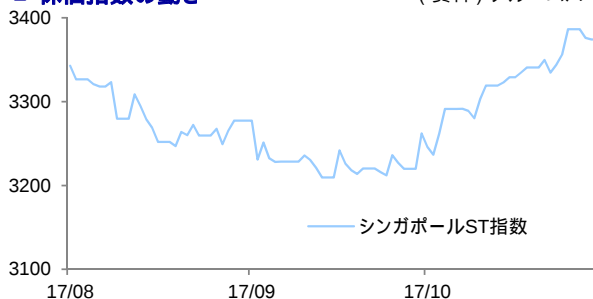
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	購買部景気指数	9月	-	52.0	51.8
10/2	電子産業指数	9月	-	53.6	53.2
10/12	小売売上高(前年比)	8月	2.4%	3.5%	1.7%
10/13	GDP(前年比)	3Q	3.8%	4.6%	2.9%
10/17	非石油輸出(前年比)	9月	12.7%	-1.1%	16.7%
10/23	CPI(前年比)	9月	1.4%	1.5%	1.4%
10/26	鉱工業生産(前年比)	9月	10.0%	14.6%	19.5%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.80 ~ 33.50
THB/JPY 3.35 ~ 3.45

バンコック資金室 井上 由貴

■ 先月の為替相場

○ドル/バーツは上値重く推移した。
上旬、ドルバーツは上値を試す展開。
9月末より、米税制改革への期待感やイエレンFRB議長のタカ派発言を背景にドル買いムードが高まったことで、ドル/バーツは33.30台前半で取引を開始。9月消費者物価指数(CPI)は前年比+0.86%上昇となり、8月から小幅に加速。スペイン・カタルーニャ州の独立問題を巡りユーロ売りドル買いが優勢となったことで3日にはドル/バーツは10月高値となる33.50台前半まで上昇した。しかしこの水準ではバーツ買い意欲も強く上値は抑えられた。6日には9月米雇用統計が発表され、非農業部門雇用者数がマイナスの数字となったが、平均時給が予想以上に堅調だったことからドル買い優勢となり33.50近辺まで再度上昇するも、ポジション調整の動きから33.40近辺まで反落。10日には、人民元の対ドル基準値が、予想以上に人民元高に設定されたことをきっかけにアジア通貨高の展開。ドルバーツも33.20台半ばまで下落した。中旬、ドルバーツは反落。
米税制改革実行に対する不透明感の高まりからドル売りの流れとなり33.10台まで下落。13日に発表された米9月CPIが市場予想を下回りドル売りが優勢となると、16日には月安値となる33.00台半ばまで下落。しかし、海外時間に次期FRB議長候補としてタカ派として知られるスタンフォード大学教授のテイラー氏が有力であると報じられると、ドルは小幅に反発し、FRB議長人事への期待感に支えられる形で33.20近辺まで上昇。19日にはウイラタイ・タイ中銀(BOT)総裁から2018年のインフレターゲットが+1-4%に据え置かれる予定であることが発表された。また、タイバーツは他のアジア通貨やタイ経済状況に沿った動きをしているとし、バーツ高けん制トーンは見られなかった。
下旬、ドル/バーツは底堅く推移した。
23日、週末に実施された本邦衆議院選挙にて与党が圧勝したことを受け、日経平均株価が15営業日連続で上昇推移する等、株式市場全般に堅調な動きとなるも、タイ休日でありドル/バーツの反応は限定的。25日よりプミボン前国王の葬儀が始まり、ドル/バーツもレンジ推移となったが、26日に開催されたECB政策理事会の内容がハト派と捉えられ、ユーロ売りドル買いが優勢となるとドル/バーツも27日には33.30台まで上昇した。

■ 今月の見通し

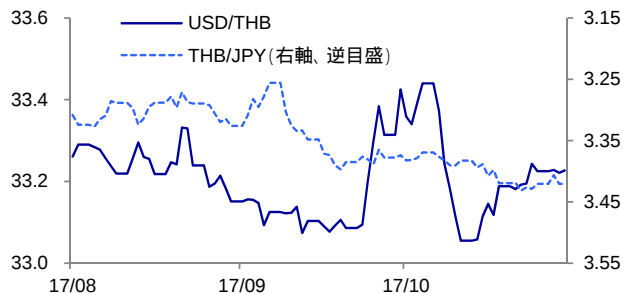
○ドル/バーツは上値重い推移を予想する。
足元のドルバーツは他の通貨同様、次期FRB議長候補への思惑や米税制改革への期待感といった国外要因に左右される形でドル高バーツ安となっているが、あくまで期待先行の感が否めない。テイラー氏のFRB議長就任の可能性に踊らされ、ドルはずいぶん高い水準まで来てしまい、今月初旬に誰が次期議長に選ばれようとも一旦は絶好の利食いのタイミングになりそうである。12月には年内最後のFOMCで利上げが決定される見込みだが、注目度は薄く、今月以降は、次期議長の下でどのような金融政策運営が行われるかという思惑がマーケットの話題の中心になりそうだ。タイ国内に目を向けると、昨年10月にプミボン前国王が崩御してから1年間続いた服喪期間が終了した。自粛・延期されていた各種イベントが年末にかけて開催されるとの見込みもあり、消費活性化への期待は根強い。また、足元のバーツ高にも関わらず輸出は好調をキープしており、タイ政府は経済見通しに関して強気である。商務省が17年通年の輸出見通しを従来の前年比8%増から同8%超の増加に引き上げた他、10月30日には財務省が17年のGDP成長率を従来の前年比3.6%から3.8%に上方修正している。10月はBOTの金融政策決定会合(MPC)は実施されなかったが、今月は8日に実施される。9月のMPC前に財務省から再三利下げ要請があったことは記憶に新しい。BOTは全会一致で政策金利据え置きを決定し、財務省からの要請を撥ね付け、足元では財務省からの利下げ要請も沈静化している模様である。アジアの周辺国を見渡すと、インドネシア中銀等は依然利下げサイクルの中にあるが、韓国中銀(BOK)が金融正常化ムードに入り始めていることは注目しておきたい。足元の政策金利の水準に近い(BOT:1.50%、BOK:1.25%)ということもあるが、過去のデータを見ると両中銀は近いタイミングで金融政策の変更をしていることが多い。BOKが利上げならBOTも追従して利上げ、というのはあまりに短絡的な予想かもしれないが、日本を除く先進国の中で一周しつつある金融正常化ブームがついにアジアにやってくるとすれば、利上げに近いのは絶対水準自体が低い韓国中銀、そしてBOTと考えておいても良いかもしれない。事実BOTはMPCにおける声明文でも、低金利を長期に亘って継続するリスクに関しては再三言及している。以上、ドル高が巻き戻される可能性や好調なタイ経済状況を勘案すれば、ドルバーツのバーツ高基調は変わらず、再び33割れを伺う展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の当地のセール(バーゲン)事情』
言われてみれば日本の「初売り」のような毎年恒例のセールってあまり聞かないなと思い、色々とタイ人スタッフに聞いてみました。彼女たち曰く、決まった時期に合わせたセールはなく、そもそもセールをするか、いつ実施するかは経済状況や百貨店の業績による、との謎の回答が返ってきました。基本的に放っておいても消費が盛り上がる年末年始やソークラン(タイのお正月)は大規模なセールは行われず、百貨店の決算前かつ業績があまり良くない場合に大規模なセールが行われるようです。そんな中でもひとつ特徴的なのは「ミッドナイトセール」でしょうか。言葉通り、深夜まで続くセールです。「お給料はすべて自分のためのショッピングに使いたいから一生結婚したくない」が口癖の女性同僚による「長年に亘る観察」の結果、ミッドナイトセールの時期は百貨店によりまちまちだが大体年2回。タイ人は給料日には全してお金がなくなる人も多く、子どもたちの学校が始まる5月中旬は何かと物入りでショッピングに費やすお金はない。よって、教育費の支払いが落ち着く6月頃には消費が戻ってくるため、ミッドナイトセール第一弾が行われます。ミッドナイトセールの数日間、通常9時くらいで営業を終える百貨店は深夜12時まで営業しており、遅くまで仕事をしている人でも仕事終わりに駆けつけことが出来るわけです。働く私たちに優しいミッドナイトセール。年中暑いタイなのに、冬になると何故か革ジャンやらダウンやらも売っているミッドナイトセール。ありがとうミッドナイトセール。と、このコラムの為に根拠り葉堀り話を聞いていたところ、「ヘッドオフィスはセール事情の実地調査の為に、井上さんに予算を用意したほうがいいんじゃないか。」という意見がありました。もっと役立つ情報もご提供できるかと思いますので、ヘッドオフィスの皆さま、ご検討の程宜しくお願いします。

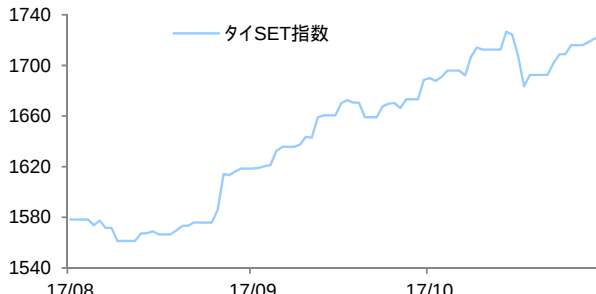
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	消費者物価指数(前年比)	9月	0.50%	0.86%	0.32%
10/2	CPIコア(前年比)	9月	0.50%	0.53%	0.46%
10/5	消費者景気信頼感	9月	-	62.5	62.4
10/19	自動車販売台数	9月	-	77,592	67,962
10/19	貿易収支(通関ベース)	9月	\$2096M	\$3358M	\$2090M
10/19	輸出(通関ベース/前年比)	9月	10.80%	12.20%	13.20%
10/31	輸出(前年比)	9月	-	13.40%	15.80%
10/31	経常収支	9月	\$4213M	\$6287M	\$4657M

マレーシアリング相場

予想レンジ:

USD/MYR	4.1900	~	4.2600
MYR/JPY	25.85	~	27.32
JPY/MYR	3.6400	~	3.8700

(100円あたり)

マレーシアみずほ銀行 山田 輝彦

■ 先月の為替相場

10月のリングgitは4.21~4.24を中心とした狭いレンジ内での動きとなった。

月初のリングgitは米年内利上げ期待感に加え、次期FRB議長人事を巡りタカ派と目されるウォーシュ元FRB理事の可能性が取り沙汰されたことでドル買いの動きが強まったことやスペインのカタルーニャ州独立を巡る政治的混乱を嫌気したユーロ売りの動きにリングgit売りで反応し3日には一時9月6日以来の4.2430を付けたが、その動きも長くは続かず4.23台に押し戻された。4日は今度は次期FRB議長にハト派と目されるパウエルFRB理事の名前が挙がりドル売りになったことで、リングgitは一転買われる展開に一時4.2230を付けた。しかし5日には前日米国時間に発表された良好な米経済指標等で再びドル高の流れになり、リングgitは再び売られる展開となった。週明けは前週末の良好と受け止められた米9月雇用統計でのドル買いやその後の北朝鮮情勢を警戒したドル売りにやや反応した格好だったが、9日は米国、日本ともに祝日でその後の値動きは限定的だった。10日は人民元の対ドル基準値が前日比人民元高に設定されたことで、人民元高が大きく進み、リングgitも4.22ちょうど近辺まで買い進められた。しかし11日以降は、米税制改革案に不透明感が出てきたことやスペインカタルーニャ独立問題が出る一方で、主要株式市場が堅調に推移したことで、アジア通貨が軒並み堅調地合いを維持する中、リングgitも4.22ちょうどを挟んでの小動きに終始し、結局4.22台前半で取引を終えた。

月半ばでは先週末の事前予想を下回る米9月CPIを受けてややリングgit高に推移したが方向感には欠ける動き。翌17日は前日海外時間で次期FRB議長候補として量的緩和に反対でタカ派と見られるテイラー氏が有力との報道にドル高が強まったことで、リングgitは4.22台半ばまで売られた。祝日明けの19日も動意に欠ける展開となったが、20日にはアジア時間に米国の上院で10年間で最大1.5兆ドルの財政赤字拡大を認める予算決議案が可決されたとの報道にドル買いが強まったことを受け、リングgitも連れ安となったが、動きは限定的で結局4.22台後半で取引を終えた。

下旬に入っても明確な方向感はず、リングgitは25日現在4.23台前半で取引されている。

■ 今月の見通し

11月のリングgitは米動向に警戒しつつも膠着感の強い相場展開を予想。

本見通し作成時には発表されていないが、10月27日に予定されている来年度予算案発表が国内発では相場に方向感を与える可能性があるだろう。結局総選挙前の発表となったことで、特に投資家が注視する財政健全化にどこまで踏み込むのか注目したい。

また米国では予算決議案の通過、年内利上げに対する期待に加え次期FRB議長への思惑で、ドル買い圧力がこのところ高い。但し、これまでもその期待感が失望に変わりドル売りの流れになった点を踏まえると、仮になるにしても一辺倒のドル高相場になるのはまだ時間を要するのではないかと。また北朝鮮という地政学リスクも相場変動要因として注意を要する。

以上より、国内ファンダメンタルを前提とすれば緩やかなリングgit高を予想するも、米国を中心に国外不確定要素が多いことからリングgitは膠着感の強い相場展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のセール(バーゲン)事情』
正直、マレーシアに駐在して3年半が経ちますが、クアラルンプールが世界第4位の買い物都市にランクインされているとは露とも知りませんでした。アメリカの放送局CNNの発表によれば、ニューヨーク、東京、ロンドンに次いで第4位だそうです。
まあ確かに、特にここ数年はリングgit安が顕著なのでマレーシア国外からすれば物価に一段と割安感が出ていたのだと思いますが、そこに更に追い討ちをかけるのが年に3回大々的に開催されるセールなんだと思います。これもまた、そんな名称があったのかと初めて知りました。

ワンマレーシア・スーパーセール(3月頃)

メガセール・カーニバル(夏頃)

イヤーエンドセール(年末)

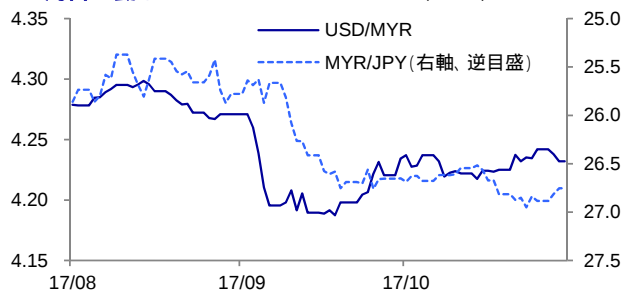
と銘打っています。
時期はインターネット等でご確認頂きたいですが、メガセールは恐らくラマダンの時期に合わせているような気がします(ラマダンプロモーションという認識があったもので)。

この期間中は超有名ブランドでもセール対象品であれば50%だとか70%割引とか、確かに見掛けました。

恐らく世界有数の高級ホテルに安く泊まれるクアラルンプール、観光名所が少ないのは否めない(個人的印象)ですが、このセールの時期に訪問されては如何でしょうか。

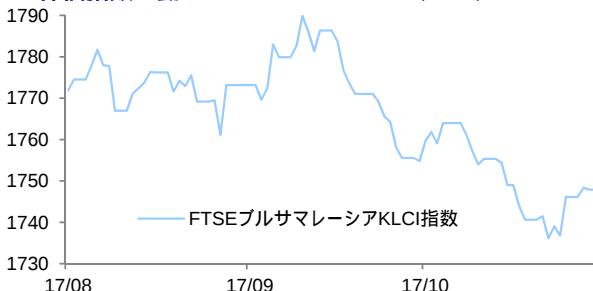
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/6	輸出(前年比)	8月	20.0%	21.5%	30.9%
10/6	輸入(前年比)	8月	20.9%	22.6%	21.8%
10/6	貿易収支(MYR)	8月	9.75B	9.87B	8.04B
10/6	外貨準備高(USD)	9/29		101.2B	100.8B
10/12	鉱工業生産(前年比)	8月	5.8%	6.8%	6.1%
10/12	製造業売上(前年比)	8月		16.5%	22.2%
10/20	CPI(前年比)	9月	4.3%	4.3%	3.7%
10/20	外貨準備高(USD)	10/13		101.4B	101.2B

(資料) ブルームバーク

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13300 ~ 13700
 IDR/JPY 0.80 ~ 0.87
 JPY/IDR 116.16 ~ 124.00

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

■ 先月の為替相場

10月のドルルピアは、13455～13650のレンジでの取引となり、月中旬まで13500近辺での取引継続後、月末にかけて上昇した。

月初、9月末より進行したルピア安の流れを受け、13475近辺でスタートしたドルルピアは、上昇圧力が継続し、3日には、一時10か月ぶりの高値となる13590をつけたが、中銀介入観測もあり、終盤にかけて下落。

2日発表されたインドネシア9月CPIは、前年同月比+3.72%の上昇とほぼ予想通りの結果で相場への影響は限定的。また、6日に発表されたインドネシア9月外貨準備高は、前月より+6億ドル増加の1294億ドルとなり、上昇幅は鈍化したものの、順調に増加した。

その後、月中旬まで、中銀介入観測もあり、上値を抑えられる形で、13500近辺の取引が継続。16日発表された9月インドネシア貿易収支は、予想を大きく上回る17.6億ドルの黒字を計上した。

10月発表されたインドネシア国内経済指標の結果は、比較的良好であったが、月下旬より、米金利上昇を受けたドル高の中で、ルピアも売られ、27日には一時13650まで上昇。結局13620近辺で取引を終了した。(10月27日現在終値)

インドネシア総合株価指数が、史上最高値を更新し6000ポイントに至現した中で、債券は逆に売られ、インドネシア国債金利は上昇、10年債利回りは、9月末の6.5%近辺から6.8%超えまで急騰した。

19日、インドネシア中銀が開催した定例会合では、米金利上昇を受けた国外要因を考慮し、ターゲットレート(中銀7日ものリバースレポレート)を4.25%で据え置いた。

■ 今月の見通し

今月のドルルピアは、米国を中心とした国外要因に振られる展開を予想する。

今月は、インドネシア国内では、毎月発表の経済指標に加え、7～9月期GDPと経常収支が発表される。双方、景気減速と収支の悪化というようなネガティブサプライズはなく、国内経済指標は、比較的良好な結果となると予想しているが、相場への影響は限定的と見ている。

一方で、年初来続いた旺盛な海外投資は、米金利上昇を背景に、9月末より陰りを見せている。

インドネシア国債発行の海外投資家保有額は、9月27日に市場最高をつけた後、約20兆ルピア(保有残高の約2%に相当)減少(10月25日時点)。

この海外投資家のルピア売りフローが、9月下旬より進行したドルルピア上昇の要因となっており、海外投資家の動向に注意が必要な状況だ。

米金利が上昇もしくは現水準を維持するようであれば、海外投資家の積極的な買戻しは想定し難く、ドルルピアは上昇圧力のかかりやすい展開を予想する。

ただし、従来より記載している通り、過去最高値更新を続ける外貨準備高など、ルピア急落への備えは着実にできており、大幅な上昇の可能性は低いと見ている。

上記の通り、ドルルピアに上昇圧力がかかりやすい状況を勘案、インドネシア中銀の金融政策については、金利据置を予想している。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のセール(バーゲン)事情』

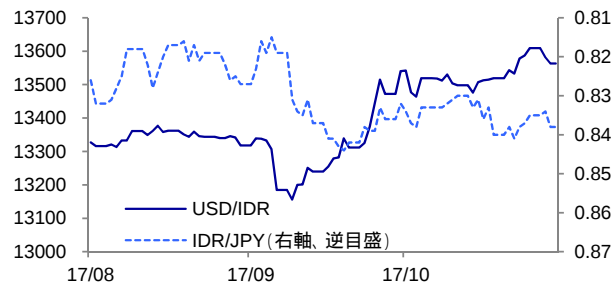
インドネシアでは、レバラン(断食明け大祭)、クリスマス、旧正月など、イベント前には盛大にセールが行われます。

このこと自体は他の国と大きく変わらないと思いますが、10月ぐらいでしょうか、欧米や日本等で秋物が出回り始める頃、「常夏の国:インドネシア」でも同じように、秋物の衣類が、売り場に出回り始めます。

それを熱心に物色している現地の方を見ると、「いつ着るんですか?」と思わず突っ込みを入れたくなります。

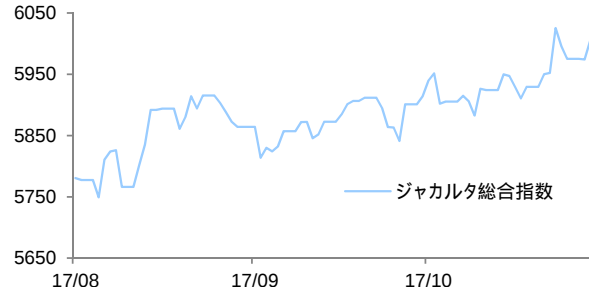
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	CPI(前年同月比)	9月	3.70%	3.72%	3.82%
10/6	外貨準備高(USD B)	9月	-	129.4	128.8
10/16	輸出(前年比)	9月	18.04%	15.60%	19.24%
10/16	貿易収支(USD M)	9月	1,257	1,761	1,720
10/19	BI 7daysリバースレポ金利		4.25%	4.25%	4.25%

フィリピンペソ相場

予想レンジ:	USD/PHP	51.40	~	53.00
	PHP/JPY	2.16	~	2.22

マニラ支店 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

ドルペソ為替相場(インターバンク・オンショア市場)は、1米ドル=50.90ペソで取引開始。
世界景気の楽観論が強まり、米長期金利の上昇で、ドルが買われやすい状況。1米ドル=51ペソ台を回復。
しかしながら、6日に発表を控える米雇用統計を前にしてドルの上値は重かった。5日にフィリピン統計庁(PSA)が発表した比9月消費者物価指数は前年同月比+3.4%となり、前月の3.1%(改定値)から0.3ポイント上昇、年内のペソの利上げ観測が再び高まり始めたこともドルの上値がキャップされた原因。ドルペソ為替相場は、1米ドル=51.15ペソで雇用統計を迎えた。
弱い米9月雇用統計は、自然災害の影響を受けたもの、と市場は悪材料を消化。逆に平均時給の結果は良好でドル買い要因に。
更には、比7月海外直接投資金額の落ち込みと比8月貿易赤字が市場予想を上回る赤字となったことでドル買いに勢いがついた。ドルペソ為替相場は、13日には1米ドル=51.61ペソで取引される場面も。その後、当局介入が意識されて1米ドル=51.39ペソまで戻されて越過。
17日のドルペソ為替相場は、1米ドル=51.28ペソと前週の終値対比11セントバスのペソ高で取引開始、一時1米ドル=51.19ペソまでペソの買い戻しが進んだ。
ペソ買いの背景にあったのは、前週金曜日(13日)に発表された米9月消費者物価指数(前月比)が市場予想を下回ったこと、また16日に発表された比8月OFW(海外在留フィリピン人労働者)送金は前年同月比7.8%増(市場予想5.5%)、金額ベースで2,499百万ドルと前月の2,283百万ドルから増加したことが挙げられる。
しかしながら、ペソの買い戻し一巡後は、17日には米9月輸入物価指数が予想を上回ったこと、次期米連邦準備制度理事会(FRB)議長を巡る思惑、堅調な米国株価の推移により根強いドル買いが見られた。20日の終値は1米ドル=51.45ペソ。
週明け23日のドルペソ為替相場は、ドル買い地合継続。25日には、米10年債金利が節目とされていた2.4%を上抜けると、8月18日につけた直近高値である1米ドル=51.63ペソを大きく抜けて27日には一時1米ドル=51.85ペソで取引された。
(10月30日現在)

■ 今月の見通し

今後のドルペソ為替相場だが、いよいよ1米ドル=52ペソ台が射程圏に入ったといえよう。
中銀が、現在のドルペソ為替相場の水準を楽観視している点は、市場参加者にとってドルを買い進めやすい状況。ただし、エスペニリヤ中銀総裁からは戦略的な市場介入を行う、とのアナウンスがあり、当局スタンスを確認しながらドルの上値を試す展開が予想される。

23日に発表された比9月財政収支は、先月の288億ペソの黒字から369億ペソの赤字に転落。過去のデータから見れば月々のブレの範囲ともいえようが、双子の赤字が嫌気される現在の市場環境下、今後の推移には注目。

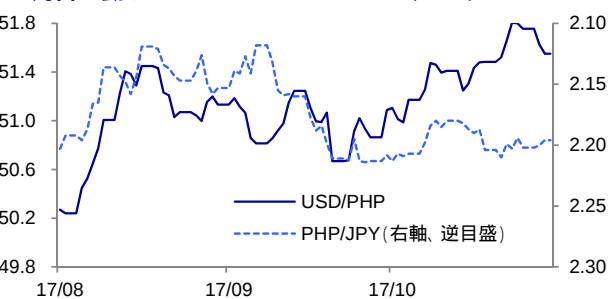
ペソ買いの材料としては、フィリピンのロレンザーナ国防相が『ミンダナオ島マラウイ市で続いていた治安当局とイスラム過激派の戦闘が終結した』と宣言したことが挙げられよう。市場の反応は限定的となっているが、外国人の投資マインド改善により、フィリピン買い、ペソ買いに繋がる可能性がある。

また、時節柄OFW(海外在留フィリピン人労働者)送金が増えることも予想され、実需のフローはドルの上値を抑えそう。

今後の注目材料としては、まずは10月31日~11月1日にかけての米連邦公開市場委員会(FOMC)。今回合会では、金利は現状維持というのが市場コンセンサスだが、年内にあと一回の利上げを想定している中で、自然災害の影響を受けている9月以降の経済指標をどう判断するかに注目。また、3日には米10月雇用統計が発表される。
米金利の利上げを強烈にサポートする結果となれば、ドルペソ為替相場は1米ドル=52ペソ半ばへと月初早々に上昇しても驚きはしない。
(10月30日現在)

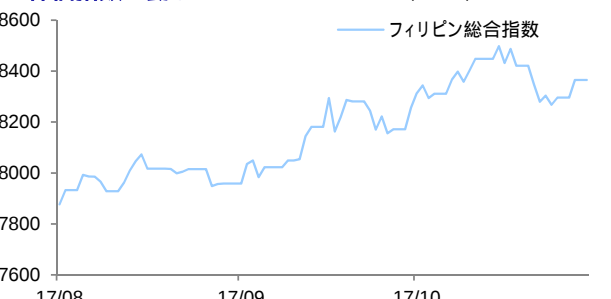
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記ご参照

(資料) ブルームバーク

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR 64.50 ~ 66.00
INR/JPY 1.72 ~ 1.77

アジア・オセアニア資金部 田川 順也

■ 先月の為替相場

【10月の米ドル/インドルピーは水準をやや切り下げる展開】

65.63レベルで当月取引を開始したドル/ルピーはインド中銀政策決定会合で中銀が今後の物価見通しに対して強気、18年1-3月期には物価ターゲットである4%を上回るとした上で、金融政策決定に際しては物価水準達成に重きを置くことを再度強調したことから当面の利下げ予想が後退、一時的にルピー高に振れるも、同時に成長率見通しを引き下げたことからルピー買いは続かず、むしろスペインのカタルーニャ州独立にかかるリスク回避的な動きの中でのドル買いに加え、ISM、貿易収支、製造業受注、平均時給と軒並み強い米経済指標に為替市場ではドル選好が進む。

月半ばにかけてはFOMC議事録で年内の利上げに対して不透明とも受け止められる内容が示され、米国物価指標が事前予想を下回ったことも相まって更に利上げに対して不確実性が増すとドルが売られる展開。16日には当月の安値となる64.69まで下落。

ただし、次期FRB議長に金融引締め派の考えの候補が有力とされると、水準を戻しに行く展開。終盤にかけては同次期議長が誰になるのか見極めたいとの見方から大きくは動きづらい展開に小動きだったが、月末には印銀行に資本注入の話題に株が急伸、SENSEXが33000を超えていく流れにルピーもつれられドル/ルピーも急落するが、長くは続かず、翌日には水準を戻した。27日執筆時点では65ちょうどレベルでの推移となっている。

【10月のインドルピー/日本円はみあいの後、上にブレイクした】

1.726レベルで当月をスタート。インド中銀政策決定会合通過後にはルピー/円も上昇したが、ドル高の流れになると、ドルを基軸にルピーも円も下落する中で、ルピー/円は1.72-1.73での小動きに終始。10日に一時当月安値となる1.716をつけるも方向感はず。

もみあいが続くが、本邦選挙をうけ、ドル円が114円台を触りに行くのとルピー/円も急伸、1.75を超える展開。終盤にかけても高値圏を維持し、27日時点では1.753レベルで取引されている。

■ 今月の見通し

【11月の米ドル/インドルピーは底堅い展開を予想】

左記の通り、インドからの材料が先月は2つあり、①インド中央銀行の見通しでは物価の側面からは利下げの必要性が薄れていることを示唆する内容となっていることが確認できた。②また、月末には政府が事前予想の10倍の金額となる2兆1100億ルピーの資本注入を国有銀行に対して実施することを発表、またインフラにも1080億ドル(約70兆ルピー)を投資する計画を発表し、非常に大きなニュースとなった。

為替市場ではいずれもルピー高材料として受け止められたが、共に材料としての持続力はなく、消化後は発表以前の水準に戻る動きとなっている。

反対に米国材料である。足許は押し目のない株の上伸が続いており、先月末は税制改革案の実現期待も相まってドルインデックスは底堅い推移となっている。これらがとん挫しないのであれば今月についてもドルは堅調地合いとなろう。

そして次の大きなイベントではFRB議長人事。誰が指名されるのか予想することは至難であるが、市場参加者の間で最有力視されているパウエル氏が指名された場合、ドルに対して支援材料となろう。

基調ドル高を予想する中でドル/ルピーも底堅い展開を予想したい。ただ、9月の急激な上昇時にはインド中央銀行からルピー買い介入が出ていることや、65後半ではチャートポイント的にも重くなることが想定され、上伸していく展開というよりは底堅い展開という表現にとどめておく。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のセール(バーゲン)事情』

インドでバーゲンセールという、10月頃の新年の祭・ディワリのセール、さらに1-2月の年明けセール、6-7月のサマーセールです。基本的に年中同じ服が着られる季節がら、バーゲンにはあまり魅力を感じません。それでもつい人間観察を理由にショッピングモールへ出かけてしまいます。

インド人が服を買うときは、家族・友人・パートナーを連れて行きます。人気のショップだと試着室の前に10人以上並んでいることもしょっちゅうで、パートナーの男性を列に並ばせたまま、女性は自分の番がくるまで物色しています。インドは男尊女卑が強いといわれていますが、このような光景をみるにつけ、インドも変わってきていることを実感します。

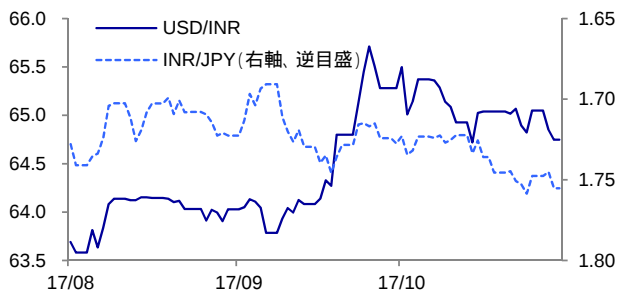
どんなに並ぶのがいやでも、買う前には試着は必ずしましょう。なぜなら、これまで試着されまくったせいで、衣類はすでに相当のダメージをうけていることも多く、ボタンがとれていたり、口紅が服についているんです。フェイスカバーなんてものはありません。

試着室の鏡でチェックすれば十分、とはいかないのがインド。着替えたら試着室からパートナーを呼び、商品のチェック。これが何度も繰り返されます。。

買いたいものが買える人のバーゲンはそんな感じですが、実際にインドで「バーゲン」というと、bargain(駆け引き)です。インドでモノを買うときは、バーゲンをお忘れなく。(ムンバイ支店 渡辺)

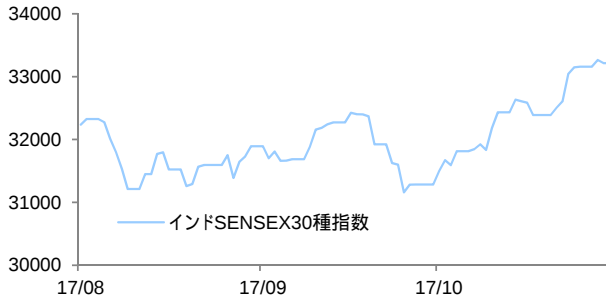
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

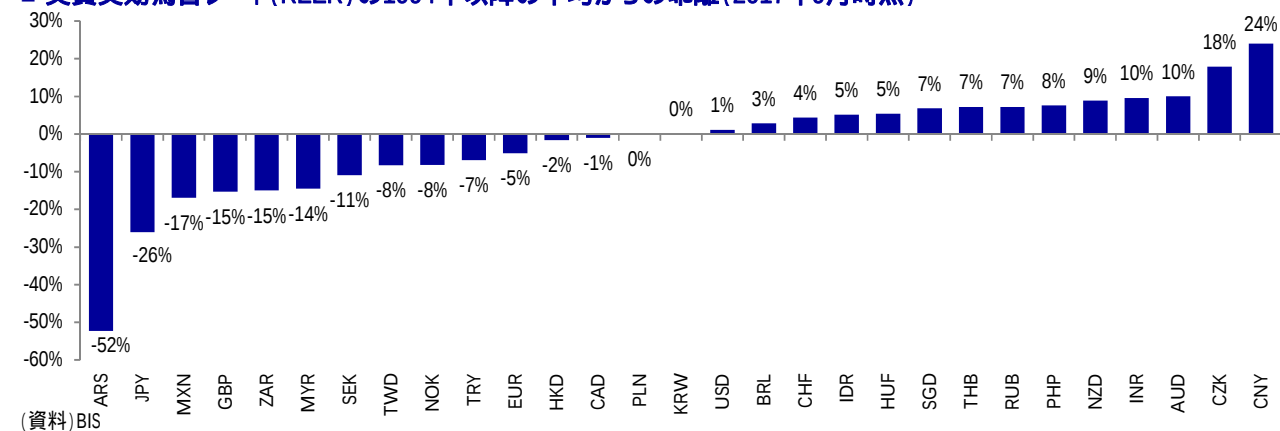
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	PMI製造業	9月	-	51.2	51.2
10/4	政策金利	-	6.00%	6.00%	6.00%
10/5	PMIサービス業	9月	-	50.7	47.5
10/12	鉱工業生産(前年比)	8月	2.6%	4.3%	0.9%
10/12	消費者物価指数(前年比)	9月	3.53%	3.28%	3.28%
10/13	輸出(前年比)	9月	-	25.7%	10.3%
10/13	輸入(前年比)	9月	-	18.1%	21.0%
10/16	卸売物価(前年比)	9月	3.30%	2.60%	3.24%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2016年末	2017年10月末	騰落率	株式市場	2016年末	2017年9月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	19762.6	23377.24	18.3%	-
日本	USD/JPY	116.96	113.64	-2.8%	日経平均株価	19114.37	22011.61	15.2%	18.5%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0517	1.1646	10.7%	ドイツDAX指数	11481.06	13229.57	15.2%	15.2%
英国	GBP/USD	1.234	1.3283	7.6%	ロンドンFTSE100指数	7142.83	7493.08	4.9%	-2.5%
豪州	AUD/USD	0.7208	0.7656	6.2%	S&P/ASX200指数	5665.8	5909.017	4.3%	-1.8%
カナダ	USD/CAD	1.3441	1.2888	-4.1%	S&Pトロント総合指数	15287.59	16025.59	4.8%	9.3%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.945	6.635	-4.5%	上海総合	3103.637	3393.342	9.3%	14.4%
香港	USD/HKD	7.7559	7.8011	0.6%	香港ハンセン	22000.56	28245.54	28.4%	27.6%
インド	USD/INR	67.9238	64.7475	-4.7%	インドSENSEX30種	26626.46	33213.13	24.7%	30.9%
インドネシア	USD/IDR	13473	13563	0.7%	ジャカルタ総合	5296.711	6005.784	13.4%	12.6%
韓国	USD/KRW	1205.83	1120.34	-7.1%	韓国総合株価	2026.46	2523.43	24.5%	34.0%
マレーシア	USD/MYR	4.4862	4.232	-5.7%	ブルサマレーシアKLCI	1641.73	1747.92	6.5%	12.9%
フィリピン	USD/PHP	49.6	51.55	3.9%	フィリピン総合	6840.64	8365.26	22.3%	17.7%
シンガポール	USD/SGD	1.4468	1.3628	-5.8%	シンガポールST	2880.76	3374.08	17.1%	24.3%
台湾	USD/TWD	32.326	30.163	-6.7%	台湾加権	9253.5	10793.8	16.6%	25.0%
タイ	USD/THB	35.835	33.221	-7.3%	タイSET	1542.94	1721.37	11.6%	20.3%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2017年9月時点)



■ 実質GDP成長率

	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2015	2016
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	0.6	2.2	2.8	1.8	1.2	3.1	3.0	2.9	1.5
日本*	2.1	2.0	0.9	1.6	1.2	2.5		1.1	1.1
ユーロ圏	1.7	1.8	1.7	1.9	2.0	2.3	2.5	2.1	1.8
英国	1.9	1.8	1.8	1.6	1.8	1.5	1.5	2.3	1.8
豪州	2.6	3.2	1.9	2.4	1.8	1.8		2.4	2.5
カナダ*	2.8	-1.4	4.2	2.7	3.7	4.5		1.0	1.5
エマージングアジア									
中国	6.7	6.7	6.7	6.8	6.9	6.9	6.8	6.9	6.7
香港	1.0	1.8	2.0	3.2	4.3	3.8		2.4	2.0
インド	9.1	7.9	7.5	7.0	6.1	5.7		8.0	
インドネシア	4.9	5.2	5.0	4.9	5.0	5.0	0.0	4.9	5.0
韓国	2.9	3.4	2.6	2.4	2.9	2.7	3.6	2.8	2.8
マレーシア	4.1	4.0	4.3	4.5	5.6	5.8		5.0	4.2
フィリピン	6.9	7.1	7.1	6.6	6.4	6.5		6.1	6.9
シンガポール	1.9	1.9	1.2	2.9	2.5	2.9	4.6	2.0	2.0
台湾	-0.2	1.1	2.1	2.8	2.7	2.1	3.1	0.7	1.5
タイ	3.1	3.6	3.2	3.0	3.3	3.7		2.9	3.2

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	17/03	17/04	17/05	17/06	17/07	17/08	17/09	2015	2016
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.5	4.4	4.3	4.3	4.4	4.3	4.4	5.3	4.9
日本	2.8	2.8	3.1	3.1	2.8	2.8	2.8	3.4	3.1
ユーロ圏	9.4	9.2	9.2	9.2	9.1	9.0	9.0	10.9	10.0
英国	4.6	4.6	4.5	4.4	4.3	4.3		5.4	4.9
豪州	5.9	5.7	5.5	5.5	5.6	5.6	5.6	6.1	5.7
カナダ	6.7	6.5	6.6	6.6	6.5	6.3	6.2	6.9	7.0
エマージングアジア									
中国	4.0			4.0				4.1	4.0
香港	3.2	3.2	3.2	3.2	3.1	3.1	3.1	3.3	3.4
インドネシア								6.0	5.6
韓国	3.7	4.0	3.6	3.6	3.8	3.6	3.8	3.6	3.7
マレーシア	3.4	3.4	3.4	3.4	3.5			3.2	3.5
フィリピン		5.7			5.6			6.3	5.5
シンガポール	2.2			2.2				1.9	2.1
台湾	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9
タイ	1.3	1.3	1.3	1.1	1.2	1.1	1.2	0.9	1.0

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	17/04	17/05	17/06	17/07	17/08	17/09	17/10	2015	2016
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	2.2	1.9	1.6	1.7	1.9	2.2		0.1	1.3
日本	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.7		0.8	-0.1
ユーロ圏	1.9	1.4	1.3	1.3	1.5	1.5	1.4	0.0	0.2
英国	2.7	2.9	2.6	2.6	2.9	3.0		0.0	0.7
豪州			1.9					1.5	1.3
カナダ	1.6	1.3	1.0	1.2	1.4	1.6		1.1	1.4
エマージングアジア									
中国	1.2	1.5	1.5	1.4	1.8	1.6		1.4	2.0
香港	2.0	2.0	1.9	2.0	1.9	1.4		3.0	2.4
インド	3.0	2.2	1.5	2.4	3.3	3.3		4.9	5.0
インドネシア	4.2	4.3	4.4	3.9	3.8	3.7		6.4	3.5
韓国	1.9	2.0	1.9	2.2	2.6	2.1	1.8	0.7	1.3
マレーシア	4.4	3.9	3.6	3.2	3.7	4.3		2.1	2.1
フィリピン	3.4	3.1	2.7	2.8	3.1	3.4		1.4	1.8
シンガポール	0.4	1.4	0.5	0.6	0.4	0.4		-0.5	-0.5
台湾	0.1	0.6	1.0	0.8	1.0	0.5		-0.3	1.4
タイ	0.4	0.0	-0.1	0.2	0.3	0.9		-0.9	0.2

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2015	2016
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.3	-2.4	-2.4	-2.4
日本	3.1	3.4	3.5	3.6	3.8	3.8	3.8	3.1	3.8
ユーロ圏	3.2	3.3	3.5	3.4	3.3	3.3	3.0	3.2	3.3
英国	-5.2	-5.5	-5.9	-6.5	-5.9	-5.4	-5.1	-5.2	-5.9
豪州	-5.6	-3.6	-3.7	-2.6	-0.8	-1.1	-2.1	-4.7	-2.7
カナダ	-3.4	-3.4	-3.5	-3.6	-3.3	-3.0	-2.9	-3.4	-3.3
エマージングアジア									
中国	2.8	2.5	2.4	2.4	1.8	1.5	1.3	2.8	1.8
香港	3.3	3.9	4.5	4.3	4.6	4.6	4.5	3.3	4.6
インド	-1.1	-1.1	-0.8	-0.5	-0.6	-0.7	-1.2	-1.1	-0.6
インドネシア	-2.1	-2.1	-2.2	-2.1	-1.8	-1.5	-1.5	-2.1	-1.8
韓国	7.7	7.9	7.9	7.2	7.0	6.4	5.7	7.7	7.0
マレーシア	2.9	2.4	1.9	1.9	2.1	2.0	2.6	2.9	2.1
フィリピン	2.5	2.1	1.1	1.0	0.2	-0.1	-0.2	2.5	0.2
シンガポール	18.1	17.2	18.8	19.5	19.0	19.8	19.6	18.1	19.0
台湾	14.4	14.1	14.3	13.7	13.5	12.9	12.8	14.4	13.5
タイ	8.1	9.9	11.0	12.2	11.9	11.2	10.6	8.1	11.9

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位: bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	1.00 - 1.25	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2017/6/14	25	2017/9/21	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2017/10/31	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2017/10/26	現状維持
英国	バンク・レート	0.25	緩和: 2007/12/6	5.75	2016/8/4	-25	2017/9/14	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2017/10/3	現状維持
カナダ	翌日物金利	1.00	引き締め: 2017/7/12	0.50	2017/9/6	+25	2017/10/25	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レボ金利	6.00	緩和: 2015/1/15	8.00	2017/8/2	-25	2017/10/4	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.25	緩和: 2015/2/17	7.75	2017/9/22	-25	2017/10/19	現状維持
韓国	7日物レボ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2017/10/19	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2017/9/7	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2017/9/21	現状維持
タイ	翌日物レボ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2017/9/27	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行